

# 名大トピックス

NAGOYA UNIVERSITY TOPICS

No.148

2005年9月

特集 名古屋大学万博記念国際フォーラム



<http://www.nagoya-u.ac.jp/>

## 目次

●特集 名古屋大学万博記念国際フォーラム	
万博記念国際フォーラム (IFSS-Nagoya 05) を開催	4
第1回 AC21学生世界フォーラム2005	
第1回 AC21学生世界フォーラム2005を開催、共同宣言を発表	7
VOICE 名古屋大学代表学生	8
VOICE 海外参加学生	9
VOICE ボランティア学生	10
Appeal for the Co-existence of Nature and Humans (自然と人間の共生のための共同宣言)	11
公開講演会「氷河期から地球温暖化、そして未来は」開催	12
21世紀 COE シンポジウム「自然の叡智に学ぶ “ものづくり”」開催	12
環境学研究科が万博記念国際シンポジウムを開催	13
エコトピア科学に関する国際シンポジウム2005 (ISETS05) を開催	13
●ニュース	
赫 冀成中国東北大学学長に「名古屋大学フェロー」の称号を授与 名古屋大学協力が発足	14
平成17年度「派遣型高度人材育成協同プラン」に採択される 名古屋大学説明会を開催	15
日本数学コンクール開催	16
第3回国際学術コンソーシアム運営委員会を開催	17
私立大学関係職員との意見交換会を開催	18
西ヶ廣日本学術会議事務局長を招き意見交換会を開催	18
技術職員研修(生物・安全管理コース)を実施	19
●教育のデザインとプラクティス	
家畜バイオ分野の国際産学協同人材育成 一キャリアパス開拓に向けた英国企業との連携— 北川 泰雄(大学院生命農学研究科教授)	20
全学教養科目「基礎セミナーA：図書館情報リテラシーを身につける」 逸村 裕(附属図書館研究開発室助教授)	22
●オフタイム	
滅び行く文化、忘却の音色 黒田 達朗(大学院環境学研究科長)	24
●職員から	
看護師として 人として 伊藤美千代(医学部附属病院7W 病棟看護師長)	25
●キャンパスクローズアップ	
医学部附属病院 新中央診療棟(第1回)	26
●部局ニュース	
モンゴル国で日本法教育研究センター準備室の看板上掲式を挙行 体験学習「石がいつできたか調べよう! 2005」開催 工学研究科がモノづくり市民公開講座を開催 工学部がテクノサイエンスセミナーを開催 農業教育公園・農業ふれあい教室(第3回)を開催 附属農場技術職員が地域貢献事業の成果について講演 数学アゴラ夏季集中コース開催 「Jr.サイエンス教室：遺伝子を見てみよう」開催 博物館第42回特別講演会開催 第6回博物館企画展「核分裂絵巻」開催中 生物機能開発利用研究センターが公開実験講座を開催	28 29 29 30 30 30 30 31 31 31 31 32 33
●新任部局長等の紹介	33
●本学関係の新聞記事掲載一覧 平成17年7月16日～8月15日	34
●INFORMATION	
名古屋大学ホームカミングデー	37
●イベントカレンダー	38
●ちょっと名大史	
NUマーク 一名大の学章—	40

## 特集

# 名古屋大学万博記念国際フォーラム



2005年日本国際博覧会（「愛知万博」、「愛・地球博」）が、3月25日（金）から9月25日（日）の185日間、愛知県の長久手・瀬戸会場において、「自然の叡智（Nature's Wisdom）」をテーマに開催されています。

本学でも、地元愛知県で開催される万博を記念して、6月から11月にかけて、「名古屋大学万博記念国際フォーラム」として、9つのフォーラム・シンポジウムを開催しているところです。

今回の特集「名古屋大学万博記念国際フォーラム」では、メインフォーラムである「万博記念国際フォーラム」と「第1回AC21学生世界フォーラム2005」を中心に、このフォーラムについて紹介します。

なお、名古屋大学万博記念国際フォーラムについては、<http://www.esi.nagoya-u.ac.jp/h/IFSS/>にも掲載されています。



6月	6.3 サテライトシンポジウム <b>第20回国際経済動態研究センターシンポジウム</b> <b>「地球温暖化と日本経済－市場メカニズムを活用して地球温暖化対策をどう進めるか」</b> 主催：大学院経済学研究科附属国際経済動態研究センター、(株)キタン会、日本経済新聞社 会場：経済学部カンファレンスホール	本誌146号 20ページ参照
	7.9～7.10 サテライトシンポジウム <b>「アジアの環境法－法の整備から執行・遵守の確保へ」</b> 主催：法政国際教育協力研究センター、大学院法学研究科 会場：シンポジオンホール	本誌147号 27ページ参照
7月	7.29～8.8 サテライトシンポジウム <b>AC21学生世界フォーラム2005</b> 主催：国際学術コンソーシアム（AC21）、名古屋大学 会場：野依記念学術交流館ほか	本誌7～11ページ
	7.31 サテライトシンポジウム <b>公開講演会「氷河期から地球温暖化、そして未来は」</b> 主催：21世紀COEプログラム「太陽・地球・生命圏相互作用系の変動学」、名古屋市科学館 会場：名古屋市科学館	本誌12ページ
8月	8.5～8.6 サテライトシンポジウム <b>21世紀COEシンポジウム「自然の叡智に学ぶ“ものづくり”</b> 主催：21世紀COEプログラム「自然に学ぶ材料プロセスの創成」 会場：IB電子情報館	本誌12ページ
	8.6 サテライトシンポジウム <b>万博記念国際シンポジウム「私たちは人間生活と環境の未来を構想できるのか？」</b> 主催：大学院環境学研究科 会場：野依記念学術交流館	本誌13ページ
	8.7 メインフォーラム <b>万博記念国際フォーラム</b> 主催：万博記念国際フォーラム組織委員会（名古屋大学、(財)2005年日本国際博覧会協会、愛知県、名古屋市、名古屋商工会議所、(社)中部経済連合会、(財)科学技術交流財団、(財)名古屋都市産業振興公社、(財)名古屋産業科学研究所 会場：豊田講堂	本誌4～6ページ
	8.8～8.9 サテライトシンポジウム <b>エコトピア科学に関する国際シンポジウム2005</b> 主催：エコトピア科学研究所 会場：IB電子情報館	本誌13ページ
11月	11.3 サテライトシンポジウム <b>「環境への生体適応の分子細胞機構」</b> 主催：環境医学研究所 会場：シンポジオンホール	

1	2	1 万博記念国際フォーラム パネル討論
		2 AC21学生世界フォーラム2005 メインエキシビジョン

# 万博記念国際フォーラム (IFSS-Nagoya 05) を開催 —持続可能な循環型社会創成をめざして—

持続可能な社会の創成をめざした「万博記念国際フォーラム」(Nagoya University International Forum for a Sustainable Society)のメインフォーラムが、8月7日(日)、豊田講堂において開催されました。

このフォーラムは、大学から社会に対する情報発信の一つとして、愛知万博(愛・地球博)が開催されるのを機会に、人類が目標とする社会のあり方や地球規模の問題解決の方向性について、世界の人々との討論と情報交換を行い、この地域の背景・特色を生かした連携活動につなげることを目的として開催されたもので、中部地域の産業界及び行政の協力を得て、本学、(財)2005年日本国際博覧会協会、愛知県、名古屋市をはじめとする9機関・団体により構成される「万博記念国際フォーラム組織委員会」の主催のもとに、組織委員会、実行委員会、学内組織委員会、準備委員会を組織し、企画・準備・運営にあたりました。

メインフォーラムでは、愛・地球博のテーマである「自然の叡知」に沿って、持続可能な社会の創成に取り組んでいる世界的に著名な識者を招き、一般市民、学生、研究者、専門家を対象とした講演と、コーディネーターに放送ジャーナリストの平野次郎氏を招いてのパネル討論が日本語・英語の同時通訳付きで行われました。

フォーラムには、暑い夏の日曜日にも関わらず、朝からの事前予約や当日参加を含めて500余名の参加があり、初めに、万博記念国際フォーラム組織委員長である平野総長から、フォーラムの開催趣旨と内容説明についてあいさつがあった後、(財)2005年日本国際博覧会協会の豊田章一郎会長から、愛・地球博のテーマである「自然の叡知」の理念に基づく同フォーラム開催の意義についてあいさつがありました。続いて、5名の招待講演者による講演(第I部・第II部)、パネル討論(第III部)及びフォーラムの夕べ(第IV部)が、下記のとおり行われました。



1

## 第I部 講演「持続可能社会へのいざない」

ドイツのヴァッパータール研究所のヴォルフガング・ザックス氏は、「持続可能な社会への道」と題して講演を行いました。講演では、特に石油などの話題を中心に、一国の使用可能な天然資源量が、環境学的・生態学的かつ公正・正義という観点で制限されており、自然環境は公平性と切り離しては考えられず、公平性もまた環境からは切り離して考えられないとの説明がありました。一方、持続可能性とは、公正・正義が成立する価値と経済の創造を意味し、現在の世界的な状況を考え、地球及び人々に重荷とならない経済を構築すべきであり、さらに、資源効率の徹底的な引き上げ、人工的な物質の流れと、自然の流れとの共存を目指す資源の調和、資源の充足など今後の産業経済全体のエネルギー及び物質使用に関する目標について解説がありました。

ロシアの宇宙飛行士のアレクサンダー・カレリ氏は、「何のために人類は宇宙飛行するのか?」と題して講演を行いました。人口過剰問題など様々な問題がある中で、人類は現状の生活を維持するために限りある資源を採取し続け、それが原因で現在地球が限界状態に達しつつあるので、そのような問題の解決法として、人口を制限して必要量を減少させること、あるいは無限の可能性を秘めた宇宙へ進出することを提案され、特に、後者の宇宙活動については、「人



2



3



4



5



6

工衛星、「科学研究」、「宇宙でのもの作り」、「地球外での植民地」など各項目に分けて、カレリ氏自身の体験談も踏まえて、現状と今後について多くのデータを基に説明がされました。

JT 生命誌研究館の中村桂子氏は、生命科学の立場から持続可能な社会について、「生命を基本に置く社会 - 生命誌の視点から - 」と題して講演を行いました。中村氏は、38億年ほど前に地球上で生まれた一つの細胞を祖先とし、多様化してきた生物の歴史との相互関係を理解するところから、人間の幸せな生き方を探る生命誌について紹介されました。ここで強調されているのは、時間（過程）とある種の予測不能性であり、過程と思いがけなさを楽しむことを組みこんだ社会システムを作ることによって、生きもの（人間も含む）が豊かに生き続ける地球で暮らせるように、食（農業）、健康（医療）、知と心（教育）、自然（環境）について、生きものという視点から望まれるシステムについて解説されました。

## 第II部 講演「循環型社会へのみちのり」

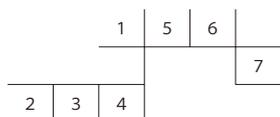
株式会社デンソーの石丸典生氏は、「共生と成長の狭間に立つ21世紀～いまこそ、人間の叡智が試される時～」と題して講演を行いました。これまで人類は、火を使うことから始まり、エネルギーを利用して豊かな社会を築き上げてきました。それも、ほんの数世紀前までは、自然エネルギーの使用のみでしたが、近年の急激な人口増加と豊かさへの欲望は、大量生産・大量廃棄を招き、地球上の資源を

使い尽くそうとしており、地球存亡の危機も囁かれるようになり、今後世界人類の永遠の存続と身近な人々の幸せとを両立させることを「科学技術の力」で解決を図ることが、「科学技術者の務め」であると「人間の叡智」という言葉も用いて参加者に訴えられました。

アメリカ合衆国 EMBARQ 世界資源研究所交通環境センターのリー・シッパー氏は、「持続的発展のための持続的都市 - 地球規模で考え、自治体規模で行動しよう - 」と題して講演を行いました。初めに、都市の定義と役割について、都市の立地、発展の背景など世界の各都市を例に解説されました。次に、持続可能な都市を創るための政策について、特にシッパー氏が専門とする都市における持続可能な交通を表現する指標が提案されました。また、交通に関する世界中の各都市の例を分かりやすく、様々な取り組みを含めて紹介しながら解説がされ、高い都市持続性を実現するための統治機構と関係機関との連携及び適切な交通政策の必要性を熱心に説かれました。



7



- 1 万博記念国際フォーラム
- 2 平野総長
- 3 豊田財2005年日本国際博覧会協会会長
- 4 ヴォルフガング・ザックス氏
- 5 アレクサンダー・カレリ氏
- 6 中村桂子氏
- 7 石丸典生氏



8



9

### 第III部 パネル討論「持続可能な循環型社会」

パネル討論は、第I部、第II部の講演者をパネリストに迎え、平野次郎氏のコーディネートによって進められました。

最初に、平野氏から、各講演についての簡単なまとめとコメントが述べられた後、シッパー氏の「中国の本格的なモータリゼーションは2035年」という予測を引用し、資源枯渇の観点から、やはり人類は宇宙に出るよりほかないのかという疑問が投げかけられました。これに対して、石丸氏は、宇宙開発への厳しい意見を展開しました。

次に、話題はアメリカへ。石油・イラク問題を考えると、背後のアメリカが無視できない、アメリカは京都議定書を批准していないが、持続可能な社会をどのように維持しようと考えているのかとの問いに対し、シッパー氏から、「何も考えていないに等しい。これは、アメリカは議論型社会であり、日本のようなコンセンサス型の国でないことが理由の一つであると思う。この30年間、アメリカが環境に貢献していないのは恥ずべきことだが、それでもカナダがガソリンの値段を倍にしたように、『資源リッチ』から『資源ワイズ』な使い方にシフトしてきている。アメリカの石油企業にも変化が見える」とのコメントがありました。また、ザックス氏からも、EU諸国では資源は必ずしも経済において重要な戦略ではないが、アメリカは「資源抽出型経済」であるとの指摘がありました。

ここで参加者から、アメリカの環境政策におけるPFIの使われ方、宇宙開発コストに関する質問があり、シッパー氏、カレリ氏らがこの質問に答えました。

最後に、「(持続可能な社会について) 楽観的か、悲観的か」という問いに対し、石丸氏は、「人類の永遠の継続と

いうことなら、あり得ない。どちらかというと悲観的。ただ、良くないのは無関心的楽観論。世界、社会のあらゆることに関心を持ってほしい」と述べられました。また、中村氏は、「生命は『循環』、『組合せ』、『可塑性』という能力によって、38億年間絶えずに生き続けてきた。20世紀の機械文明はこの能力に乏しいので、このままではダメだと思うが、生き物の能力と可能性で最終的には乗り越えられるのではないか。その意味で悲観論的楽観論者である。」と述べられました。

その後、第1回 AC21学生世界フォーラム2005の代表学生から、「自然と人間の共生のための共同宣言」について報告が行われ、ザックス氏が代表してコメントし、パネル討論は終了しました。

最後に、実行委員会を代表して、松井エコトピア科学研究所長から、地球保全のための前進の呼びかけを含めた閉会のあいさつがあり、メインフォーラムは幕を閉じました。

### 第IV部 フォーラムの夕べ(懇親会)

名古屋市内のホテルに会場を移して、講演者、主催関係者、一般参加者約60名を交えてフォーラムの夕べ(懇親会)が開催されました。組織委員会関係者のあいさつの後、輪転太鼓の凱巫(GAIA)による演奏と参加者による実演があり、会場は大いに盛り上がり、親睦を深めることができました。最後に、ヴォルフガング・ザックス氏と平野次郎氏によるスピーチがあり、全プログラムを終了しました。

万博記念国際フォーラム組織委員会事務局長 伊藤 秀章  
エコトピア科学研究所副所長

## 1. AC21学生世界フォーラムの目的

世界11カ国18大学からの学生代表18名が本学に集い、7月29日から8月8日にかけて第1回 AC21学生世界フォーラムが開催されました。AC21（国際学術コンソーシアム）は、世界の25大学から構成される学術連携のネットワークであり、本フォーラムは「万博記念国際フォーラム」のサテライトフォーラムとして企画されました。

今回のフォーラムでは、「人間と自然の共存」をメインテーマにして、「環境教育・エコツーリズム・科学技術とわれわれの責任」の3つのサブテーマを設定しました。スケジュールはAC21推進室が計画しましたが、具体的な学習活動は参加学生たちの主体性を尊重しました。1週間にわたるワークショップでは、研究発表、調査とディスカッション、フィールド訪問などに取り組み、これらの活動を通じて、上述の各サブテーマについて、堀江未来助教授（留学生センター）、大浦由美助手（生命農学）、北村友人助教授（国際開発）をチームオーガナイザーとして話し合いました。また、全体のオーガナイザーとして、前多敬一郎教授（生命農学）、野水勉教授（留学生センター）、長畑昭利教授（国際言語）、織田銃一助教授（生命農学）、許斐ナタリー助教授（AC21）をはじめとする多くの教職員のご協力をいただきました。

## 2. ワークショップで熱心にテーマを追求

学生たちは、あらかじめ3つのサブテーマから一つを選択し、事前に調査研究をしてAC21推進室に研究レポートを提出しました。「環境教育」を選んだ学生は3名、「エコツーリズム」は7名、そして「科学技術とわれわれの責任」は8名が選びました。

### (1)「環境教育－われわれは十分教育しているのか？」

このチームは、初日の報告で、津波に対する意識を高める教育、生命多様性を重視する教育、インドでの環境教育の事例を発表しました。その後のワークショップと討論を通じて3名の見解がまとめられ、最終的な発表では、自然・人間・文化の統合のためのテクノロジーへの期待、持続可能な社会を実現するための意識を高める教育の必要性、土着のテクノロジーから学ぶことの大切さ、「グローバルな環境ネットワーク」を促進するための大学連携の必要性などが報告されました。

### (2)「エコツーリズム－解決か問題そのものか？」

最初の発表では、中国・タイ・ドイツ・イギリスの学生が、エコツーリズムのもたらす自然破壊や汚染の問題、利益追求のコマーシャリズムなどの問題とともに、持続可能な開発のための政府・NGO・旅行者など利害関係者たちのあ

り方について報告しました。最終報告では、エコツーリズムは、ツアーリスト・旅行会社・研究者・環境保護団体・地域の人々・政府などの利害関係者の意識を高め、持続可能な発展を迫る重要な手段となることを提案しました。その事例として、タイ北部の赤カレン族の住む地域と中国の世界遺産である武陵源を取り上げて紹介しました。

### (3)「科学技術とわれわれの責任」

このチームは、最初のプレゼンテーションで、自動車産業、遺伝子組み換え作物、大気汚染、水の循環、地球温暖化などの事例報告を行ないました。ワークショップでの話し合いを通じて、最終的には、「遺伝子組み換え問題、新しいエネルギー利用による自動車開発、エコロジカルな産業パーク（EIP）」の3つにトピックを絞りました。これらの事例報告をつうじて、科学技術政策を政治・経済とのつながりで考えることの大切さ、規制の権威としての政府の役割の重要性、持続可能な開発のために個人の責任からグローバルレベルの責任へと高めることの大切さについて報告しました。

## 3. フォーラム全体を通じて感じたこと

コンピュータを駆使しての調査研究と共同討議の合間をぬって、学生たちは万博会場とトヨタ工場の見学に出かけ、生命農学研究科附属の山地畜産実験実習施設（通称：設楽フィールド）では、教職員のお世話によって陶器作りやそば打ち、川遊び、民家訪問を楽しむことができました。また、自由時間や夕方の時間を活用して、犬山城、鶴飼い見学、花火大会などの日本文化にふれる機会をもちました。

6日のメインエキシビションは、一般からの参加も得て行われました。平野総長が、午前と午後にわたって学生たちの発表を熱心に聞いて下さいました。総長の参加に学生たちも感激し、全力で報告していたのが印象的でした。

この10日あまりのワークショップを通じて、学生たちは環境問題への理解をさらに深め、友情のきずなを築き、新たな行動に向けての決意を固めました。彼らの決意については、「自然と人間の共生のための共同宣言」をお読み下さい。なお、この共同宣言については、本学代表学生の細江さやかさん（法学部4年生）が、7日の万博記念国際フォーラムにて報告を行いました。

これを契機に、AC21学生世界フォーラムがさらに継続されていくことを期待したいと思います。

国際学術コンソーシアム推進室長 早川 操



## VOICE 名古屋大学代表学生

### 第1回 AC21学生世界フォーラム2005を終えて



「世界各国の学生が集い、国際的な問題について話し合う」。この夏に開催された、AC21学生世界フォーラムの趣旨を聞いた時、私はすぐに参加することを決めました。なぜなら、参加者は同年代の学部生が中心ということで、これまで、学内で開かれていた多くのシンポジウムや講演会に、少しばかり敷居の高さを感じていた私にとっては、自らが主体となって参加できる、願ってもない機会だったからです。

フォーラムの日程には、議論の場だけでなく、愛知万博見学や名大生命農学研究科施設での3泊4日の合宿等も盛り込まれておりました。万博会場では参加者皆、様々な企業の先進技術に目を見張るとともに、各国の文化や地理的特徴に興味を示し、それが後の参加者同士の相互理解に大きく役立ったと思います。また合宿では、ともに生活することで、普段何気なく行っている日常的な慣習について新たな発見をしたり、それがまた議論の場に反映されたりと、参加者同士の友人としての結びつきを深めることができました。

そしてフォーラム中、最も重要である環境問題に対する議論においては、予想していた以上に、各国学生間で意見が交換されました。分からないことは自分で考え、発言することなく解決するという日本で一般的によく行われる方法でもなく、何でもとにかく発言すればよいという挙手加算式の方法でもない、バランスを保った議論ではありまし

た。しかし皆、環境問題は、全世界的な問題であるという認識をもってフォーラムに臨んではいたものの、国によって持ち合わせている社会常識が異なるため、一つの意見としてまとまるにはどうしたらよいのかということも、同時に議論の対象であったように思います。

しかし、最終的な共同宣言においては、単に社会全般に対し呼びかけをするのではなく、参加者自らが今後もボランティアとして活動を続けることなど、世界中どこにいても実行可能な、環境問題に対する前向きな提言を作成することができました。

このフォーラムを通じて、私たち学生が学問を志し、議論を重ねることを可能にするため、どれだけ多くの方々の温かいご理解・ご協力とご助言によって、これらが成り立っているのかということも痛感いたしました。平野総長、早川教授はじめ、このフォーラムに携わったすべての方々に、心より感謝申し上げるとともに、この思いと私たちの経験を2年後の第2回学生世界フォーラムの参加者にも伝えていきたいと思っております。

法学部4年 細江 さやか

7.29~7.30	学生到着
7.31	ウェルカム・ランチ、キャンパスツアー、トピックごとにグループ分け
8.1	愛・地球博を見学（世界を取り巻く環境についての学習）
8.2~8.3	大学院生命農学研究科附属山地畜産実験実習施設にて、講演会、ディスカッション、オプションツアー（川遊び、陶芸、そば打ち、民家訪問）、メインエキシビジョンに向けての準備
8.4	トヨタ工場・トヨタ会館見学（企業の環境対策について学習）、メインエキシビジョンに向けての準備
8.5	名古屋市内観光（地域の環境政策について学習）、メインエキシビジョンに向けての準備、平野総長主催によるランチ
8.6	メインエキシビジョン、記者会見
8.7	万博記念国際フォーラムに参加、送別会
8.8	学生帰国



“You make me love Japan, our friend, AC21, and our world”  
 チュラロンコン大学 Chatchavan Wacharamanatham

I have had an absolutely wonderful experience. Academically, culturally and socially it has been fabulous. I feel extremely privileged to have been a part of this inaugural AC21 forum.  
 シドニー大学 Felicity Muller

Thank you very much for everything!  
 It was nice to have one person from each university so everyone was getting to know each other at the same time. (as opposed to groups from same university)  
 ノースカロライナ州立大学 Lisa Darnell

I wanna thank Nagoya University and Natalie again, cause I really enjoy this world Forum, especially in Shitara. I've experienced a typical Japanese life. And I want to thank the volunteers here, they are all warm-hearted and friendly. 10 days' stay is quite short, but I have a great remember. If there is any chance to be back to Nagoya, 100% I will come to see all the friends here. Thank you very much!!!  
 同済大学 Yang Zhenyu

I had a very enjoyable time and the hospitality I have received can not be matched. Thank you very much for the opportunity.  
 ウォリック大学 Robert Wild

Thank you very much for the arrangement. It's really excellent.  
 復旦大学 Zhijian Qiao

To the participants of AC21 SWF 2007:  
 Kids! 1) Please learn Japanese before you come here (or the local language, pref. 100-150 hrs.) 2) Don't forget souvenirs



for your new friends & your host university. 3) Have fun & love each other like we did.  
 カセサート大学 Wit Wichaidit

愛してる AC21 & どうもありがとうございます  
 ブネー大学 Avinash Madhale

This first AC21 Student World Forum was so excellent that it will be difficult to do better next time!!  
 ボンゼンヨセ工科大学 Eric Ollinger

Double time may double the output but wouldn't double the costs!  
 THANK YOU VERY MUCH FOR THE HOSPITALITY, THE PERFECT ORGANIZATION AND ALL THE SUPPORT FOR OUR WORK!

Suggestions:  
 ・ people were getting much better in talking English after some time → longer time!  
 ・ declarations should be written in informal caucus! One would need clear instruction for writing operative clauses. All the outcome should be allowed to be put into operative clauses (not only 1 clause!) (maybe 1 declaration/each group?)  
 ・ No fish-rice-balls for breakfast, please!  
 Beside that: PERFECT!  
 フライブルク大学 Johannes Edelmann





## VOICE ボランティア学生

まず、このAC21のボランティア活動中に大変お世話になったオーガナイザーの皆様、とりわけ、ナタリー先生と長畑先生にお礼を申し上げます。また、ボランティア仲間の優しさや励ましのおかげで、楽しくかつ有意義にボランティア活動が行えたと思います。8月6日には世界中から参加した学生の皆さんの素晴らしい発表が聞けた上に、私自身も一質問者としてフォーラムに積極的に参加でき、とても光栄でした。それに加えて、8月7日のお別れパーティーも、『音舞』の華やかなパフォーマンスを楽しみ、学生同士の親交をさらに深め、大変思い出深いものになりました。AC21でのボランティアとしての素晴らしい思い出と経験は、私の中で永遠に不滅です！

大学院国際言語文化研究科博士課程前期課程1年 戸川 三千代

8月の5日と6日、私は知人の紹介でAC21のボランティアに参加しました。私は英語が苦手だったので、ボランティアや本番のプレゼンテーションを聞くことで、参加者の人と英語で話して少しでもコミュニケーションをとりたいと思っていました。実際に参加してみて、英語の力不足ではかのボランティアの方ほど参加者と英語で話ができなかったし、プレゼンテーションの英語はまったくわかりませんでした。それでも参加者の人と英語で話したり、名古屋城や大須を一緒に観光したのはとても楽しかったです。ボランティアに参加して、もっと英語を勉強して外国人が相手でももっと積極的にコミュニケーションを取れるようになりたいと思いました。 文学部1年 今井 優作

AC21に出会えてホントにラッキーだと思っています。僕は英語があまり得意ではありません！単語も文法もアクセントもめちゃくちゃで…でもこんな僕にはAC21を通し



てたくさんの友人ができました。それは今までの受験英語を超えた、本当に生きた英語を知ったのです。ジェスチャーで、単語で、勢いとテンション！！それだけで想いは伝わるんです！でももっともっと自分を知ってもらうために英語の勉強をしたいと思います。なによりも学んだこと…それは……外国人と話すのって楽しいっっっ！！文化の違いとかじゃなく純粋に楽しかった！！彼らとはまた会いたいです！ 法学部2年 岡田 健一

楽しかった！としか言いようがない2週間でした。言葉にすると軽いですが、2週間という限られた時間の中で、一宿一飯を共にしながら各国からの親友たちと1つのテーマについて考え、討論しあう。その結果生まれた私たちの「6つの宣言」もそうですが、そこに至るまでのプロセスと、多くの課外活動と、そうして出来上がった第1回AC21のネットワーク。誰の意図するところでもありませんでしたが、結果的には、全てが満面の輝きを放っていました。これ以上の体験はありません。世界各地の「縁」をこうしてつなぎ合わせてくれたAC21のスタッフの方々に本当に感謝しています。こうしてできた僕たちの「縁」が次に世界の何処で何を起こすのか。僕は楽しみで仕方ありません。 法学部4年 太田 雄也





## AC21 Student World Forum 2005

# Appeal for the Co-existence of Nature and Humans

We, the participants in the first meeting of the AC21 Student World Forum, call upon all people to promote efforts to sustain the co-existence between nature and human around the world. Our Earth has been changing rapidly in the era of globalization, but we understand and stress the importance of ensuring diversity of this world.

We, students of the AC21 member universities, have increased our understanding of international issues through sharing experiences and opinions with each other. The AC21 Students World Forum provided us an opportunity to create new relationships that lead to friendships and break down prejudicial barriers.

As the young generation, we acknowledge that we have responsibilities to address the serious problems we are facing in the 21st century and to inspire people around the world to **think globally and act locally** through tackling such problems. We therefore propose that the following immediate actions be taken:

### ◆Our joint actions:

1. Enhancing the awareness of every individual of their responsibility for the future of the society
2. Learning from nature, cultures and ancient knowledge to harmonize the world to promote the value of environmental education

3. Using the potential of ecotourism development by collecting and sharing information and experiences of areas in planning, managing and monitoring the process
4. Promoting the involvement of different stakeholders in the process of developing and regulating science and technology.

### ◆Our individual actions:

We commit ourselves to take the following actions:

1. Strengthening universities to enhance, exchange and cooperate for global environmental networking
2. Serving as a volunteer in order to improve education amongst lower income communities
3. Increasing our awareness of ecological issues and especially as tourists to inform ourselves about the destinations we are visiting, to respect the local traditions and values, to share experiences in our home countries and to minimize the environmental impact of our travel

### ◆To all of you:

We call upon all people to move forward in this endeavor to realize our propositions, which would be supported by increased efforts of each individual living on this globe.



## AC21学生世界フォーラム2005

# 自然と人間の共生のための共同宣言

第1回 AC21学生世界フォーラムの参加者である私たちは、世界中の自然と人間の間の共生を持続するために、多様な努力を行うことをすべての人々に呼びかけます。私たちの地球は、グローバル化する現代において急速な変化を遂げつつありますが、この世界における多様性を確保することの重要性を理解し、そのことを強調したいと思います。

AC21加盟大学の学生である私たちは、本フォーラムでお互いの経験を共有し合い、意見を交換するなかで、国際的な諸問題に対する理解を向上させることができました。AC21学生世界フォーラムは、お互いの友情を深めたり、偏見などにもとづく障壁を取り除いたりするうえでの新しい人間関係を構築するための、貴重な機会を提供してくれました。

若い世代として私たちは、21世紀の世界が直面する深刻な諸課題を提起し、そうした諸課題に対して世界中の人々がグローバルに考え、ローカルに行動することを促すことが、重要な責務であると考えます。そこで、以下に挙げる行動を迅速にとるよう、世界中の人々そして私たち自身に対して提案します。

### ◆私たちの行動計画

1. 私たちの社会の未来に対する私たちひとりひとりの責任についての意識を高めること
2. 自然と世界の様々な文化と古の知恵から世界に調和をもたらす方法を学び、環境教育の価値をひろめること

3. エコツーリズムの計画と管理、モニタリングによって、地域についての情報と経験を集め、それらを共有することによって、エコツーリズムの持つ潜在力を持続可能なツーリズムの発展のために利用すること
4. 科学とテクノロジーの発展と規制において、様々な利害関係者の関与を高めること

### ◆個人レベルで以下のことを行うことを誓います

1. グローバルな環境ネットワークを築き、相互に協力する大学の能力を高める
2. 低賃金地域における教育を推進するためにボランティアとして働く
3. エコロジーにかかわる問題についての私たちの意識を高めること。特に、観光客として私たちが訪れる目的地についての知識を得て、土地の伝統と諸価値に敬意を払い、また私たちの出身国における経験を共有し、私たちの旅の環境に対する影響を最小限のものにする。

### ◆みなさんへ

以上の私たちの提案がこの地球上に生きる一人一人の努力の積み重ねによって支えられ、そうした提案の実現へ向けてすべての人々が手を携えるよう、呼びかけます。

## 公開講演会「氷河期から地球温暖化、そして未来は」開催



本学21世紀 COE プログラム「太陽・地球・生命圏相互作用系の変動学」は、7月31日（日）、名古屋市科学館と共催で、名古屋大学万博記念国際フォーラム・サテライトシンポジウムとして、公開講演会「氷河期から地球温暖化、そして未来は」を開催しました。

当日は、夏休みの休日ということもあり、高校生や大学生から年輩の方まで120名の参加がありました。



参加者からの質問について議論する講師（会場：名古屋市科学館）

シンポジウムでは、小澤智生環境学研究科教授が、ゾウとマンモスの進化過程、マンモスの生活、急激な環境変化や人類による狩りによって絶滅に至った理由を解説しました。また、愛知万博に展示されている冷凍マンモス（ユカギルマンモス）のDNA解析により、ユカギルマンモスは遺伝的にはアジアゾウと近縁であるという最新の研究成果も紹介されました。

続いて、北川浩之環境学研究科助教授が、氷期・間氷期サイクルという歴史時代、さらに産業革命以降のグローバルな気候変遷について、安成哲三地球水循環研究センター教授が、アジアモンスーンが大きな影響を及ぼしている日本列島の気候の過去・現在・将来の変遷について説明しました。また、海津正倫環境学研究科教授が、地球温暖化による海面上昇の影響について、メコンデルタと濃尾平野を例に解説しました。

全体を通しての質問の時間には、「マンモスのDNAによってマンモスを甦らせることは可能か?」、「氷期と間氷期サイクルの原因は?」など多数の質問があり、4名の講師との間で活発な議論が交わされました。

## 21世紀COEシンポジウム「自然の叡智に学ぶ“ものづくり”」開催



本学21世紀 COE プログラム「自然に学ぶ材料プロセスの創成」(Nature COE) は、8月5日（金）、6日（土）の2日間、IB電子情報館において、名古屋大学万博記念国際フォーラム・サテライトシンポジウムとして、21世紀 COE シンポジウム「自然の叡智に学ぶ“ものづくり”」を開催しました。



シンポジウムの趣旨説明をする Nature COE 拠点リーダーの浅井工学研究科教授

このシンポジウムは、自然の叡智に学ぶ国内外の研究拠点やグループが集い、「自然の叡智に学ぶ」という理念の下での“ものづくり”の連携を図ることを目的に開催されたもので、学生や市民を含め272名の参加がありました。

シンポジウムでは、Nature COE 拠点リーダーの浅井滋生工学研究科教授の趣旨説明、澤木工学研究科長の開会の辞、平野総長のあいさつに続き、一日半にわたって4件の招待講演（日本2、米国1、ドイツ1）、9件の講演及び38件のポスター発表が行われました。また、シンポジウムの中で、平野総長から、Nature COE 海外連携研究機関である中国東北大学の赫冀成学長に名古屋大学フェロー第1号の称号が授与されました（詳細は、本誌14ページ参照）。

このシンポジウムでは、「自然の叡智に学ぶ」研究や人材育成に関する情報・意見の交換も行われ、研究拠点やグループの連携を深め広げる絶好の契機となりました。今後、同様の理念の下で研究を実施している個人、団体と協力して、「自然の叡智に学ぶ」という視点に立った研究に理工学の新しい分野としての地位を与え、21世紀に必ず普遍化する「自然の叡智に学ぶ」という大河の源流になることが大いに期待されます。

## 環境学研究科が万博記念国際シンポジウムを開催



万博記念国際シンポジウム「私たちは人間生活と環境の未来を構想できるのか？」(主催：大学院環境学研究科、共催：(財)UFJ 環境財団、中日新聞社、AC21)が、8月6日(土)、野依記念学術交流館カンファレンスホールにおいて、206名の参加を得て開催されました。

シンポジウムでは、世界の第一級の研究者らによる基調報告とパネルディスカッションが行われました。セッション



パネルディスカッションの様子

ンA「持続可能な自然・人間関係」では、石井吉徳前国立環境研究所長が、20世紀型文明の限界と「脱石油戦略」の必要性について、Hans-Peter Duerr マックスプランク研究所名誉理事(Russel-Einstein2005 起草者)が、持続可能なエネルギー利用の理念と安定性指標について、安田喜憲国際日本文化研究センター教授が、環境考古学の視点から持続可能性と文明・倫理との関わりについて、川田 稔環境学研究科教授が日本の伝統的自然観・倫理観について発表し、西欧と日本の世界観・倫理観が鮮やかに対比されました。セッションB「国家間の環境コンフリクト」では、国境を越える黄砂現象(岩坂泰信金沢大学教授・本学名誉教授)、EU 高速道路でのトラックへの環境負荷料金(Werner Rothengatter カールスルーエ大学教授)が紹介され、最後に行われたパネルディスカッションでは、楊東援同済大学副学長、Lee Schipper 世界資源研究所博士、児玉環境医学研究所長がパネリストに加わり、中西国際開発研究科長のコーディネートにより興味深い議論が展開され、人類にとって環境問題の解決への多くの示唆を与えるシンポジウムとなりました。

## エコトピア科学に関する国際シンポジウム2005 (ISETS05) を開催



エコトピア科学研究所は、8月8日(月)、9日(火)の2日間、IB 電子情報館において、名古屋大学万博記念国際フォーラム・サテライトシンポジウムとして、エコトピア科学に関する国際シンポジウム2005 (ISETS05) を開催しました。

このシンポジウムは、地球上で美しく繁栄した社会を将

来にわたって持続的に発展させていくために必須である、環境負荷を低減した環境調和型社会、すなわち「エコトピア」の実現を目指して開催されたもので、中国・韓国・タイ・インド等のアジアや、アメリカ合衆国、ドイツ、イタリア、イギリス等の欧米からの多数の参加者を含め、360名を超える参加がありました。

シンポジウムでは、開会にあたり、平野総長及び松井エコトピア科学研究所長からあいさつがあった後、一般・ポスターセッション及び9つのオーガナイズド・セッションが行われました。オーガナイズド・セッションでは、約200件の一般論文発表及び世界的に著名な科学者、技術者による招待講演14件があり、ナノマテリアル、環境/リサイクル・システム及びエネルギー分野における最新の研究に関する討論や情報交換が行われるなど、盛況のうちに終了しました。



あいさつする松井エコトピア科学研究所長

## 赫 冀成中国東北大学学長に 「名古屋大学フェロー」の称号を授与



平野総長から名古屋大学フェローの称号を授与された赫中国東北大学学長

赫 冀成中国東北大学学長に対する「名古屋大学フェロー」の称号授与式が、8月5日（金）、IB電子情報館において、平野総長、山下、杉浦、山本の各理事、澤木工学研究科長、浅井滋生工学研究科教授らの出席のもと行われました。

名古屋大学フェローの称号は、「名古屋大学を卒業又は修了した者及び本学の教育研究、管理運営等に寄与した者で、国内又は国外で顕著な業績を上げているもの」を対象とし、本学の国内外におけるネットワークを構築することを目的に、今年2月に新設されたものです。

赫学長は、本学工学研究科において学位取得後帰国され、本学で学んだ教育を基に、中国の主要大学である中国東北大学学長として、研究・教育、産学連携、国際交流等の発展及び大学運営に比類のない業績を上げられました。今回の授与は、このことが高く評価されたもので、第1号となります。

授与式は、名古屋大学万博記念国際フォーラム・サテライトシンポジウムとして開催された21世紀COEシンポジウム「自然の叡智に学ぶ“ものづくり”」（詳細は、本誌12ページ参照）の中で行われ、多くの教職員、学生、市民らが見守る中、平野総長から赫学長に称号記が授与されるとともに、祝辞が述べられました。次いで、赫学長からの謝辞に続き、総長に記念品が贈呈されました。式典終了後には、関係者全員で壇上での記念撮影が行われ、和やかな交流の場となりました。



赫中国東北大学学長を囲んでの記念撮影

## 名古屋大学協力が会が発足

名古屋大学協力が会設立総会が、7月16日（土）、野依記念学術交流館において開催されました。

この会は、経済・産業における様々な課題の解決に寄与し、本学と産業界がともに発展することを目的として設立されたもので、ニュースレターの発行や講演会等の活動を通じて情報を共有し、産学連携を一層深めることとしてい



あいさつする山本名古屋大学協力が会会長

ます。

総会では、規約、事業計画、予算の承認及び役員選出が行われ、会長に山本理事（研究担当）、副会長に内山田竹志トヨタ自動車㈱取締役副社長、監査役に高村徳康監査法人トーマツ公認会計士、事務局長に太田美智男総長補佐（産学官連携担当）、顧問に平野総長が選出されました。続いて、山本会長から、「産学連携は企業のニーズに対して大学が応えるといった一方向ではなく、双方向である。大学が産学連携を進めることによって研究開発をさらに発展できる。協力を通じて大いに名古屋大学を活用していただきたい。」とあいさつがありました。

設立総会終了後に開催された第1回講演会では、直江知樹医学系研究科教授、石川孝司工学研究科教授及び福島和彦生命農学研究科教授が、各々の専門分野・観点から、産学連携について自らの経験と研究成果を交えた講演を行いました。講演は好評で、参加者から次回の開催を囑望する声が上がりました。

同会は、体制の整った現在も、引き続き会員企業を募っており、多くの企業の方々の積極的な参加が期待されます。

## 平成17年度「派遣型高度人材育成協同プラン」に採択される －家畜バイオ分野の国際産学協同人材育成－

平成17年度「派遣型高度人材育成協同プラン」の審査結果が、8月5日（金）に公表され、本学が中心となり東京大学大学院農学生命科学研究科、三重大学大学院生物資源学研究科及び信州大学大学院農学研究科と共同で応募したプロジェクト「家畜バイオ分野の国際産学協同人材育成－キャリアパス開拓に向けた英国企業との連携－」（取組部局：大学院生命農学研究科）が採択されました。

今年度からの文部科学省の新規事業である「派遣型高度人材育成協同プラン」は、従来の就業体験や職業意識の形成を目的としたインターンシップとは峻別し、産学が人材の育成・活用に関して建設的に協力しあう体制を構築することにより、社会の抱える諸問題や産業界の取り組みを理解し、知的基盤社会を多様に支える高度で知的な素養のある人材を育成する、これまでにない大学院における新たなコンセプトの産学連携高度人材育成を推進するものです。

申請にあたっては、大学としてのビジョンによる学長、研究科長等を中心とするマネジメント体制の下で修士課程（博士課程前期課程を含む）等の教育課程において、科学技術分野及びそれに関連する人材を育成する観点から、産

学が協同して、企業等の現場を活用した「高度専門人材」の育成を行う新たなコンセプトのインターンシップの開発を目指した教育プロジェクトを対象として募集があり、国公私立大学大学院から55件の応募がありました。審査の結果、本学が中心となり応募した共同プロジェクトを含めて20件が採択されました。

なお、「家畜バイオ分野の国際産学協同人材育成－キャリアパス開拓に向けた英国企業との連携－」の詳細については、本誌20ページ「教育のデザインとプラクティス」をご覧ください。

# 名古屋大学説明会を開催

－東海（学内）、関東、近畿の3地区で高校生約5,600名が参加－



全体説明

本学では、大学進学希望者に対し、教育・研究の特色の紹介や施設見学を通じて、本学への進学の目的意識を持ってもらうため、学内外で大学説明会を開催しています。

今年度は、昨年度同様、東海（学内：8月9日（火）～11日（木））、関東（横浜市：8月3日（水））、近畿（大阪市：8月22日（月））の3地区で開催しました。

学内での説明会には、3日間を通して、5,517名の参加（9日：文・教育・法・経済の各学部対象で2,076名、10日：理・医・農の各学部対象で1,865名、11日：情報文化学部・工学部対象で1,576名）がありました。午前中の全体説明では、平野総長のあいさつ、若尾副総長による大学の概要及び教育体制の説明、大学紹介DVDの上映が行われ、会場の豊田講堂は高校生たちの熱気で溢れていました。午後からの学部説明会では、学部長をはじめ教職員と学生が協力して趣向を凝らした学部紹介、懇談会、研究室紹介、施

設見学、ミニ講義等が行われました。各会場では、教員や在學生と直接懇談したり、自分の進路等について詳しく説明を聞き、熱心に質問やメモを取ったりする高校生の姿が見られ、大学説明会が行われた3日間、東山キャンパスは高校生で賑わいました。

また、学外での説明会（横浜地区：29名、大阪地区：29名）では、若尾副総長、各学部教員及び関係職員から、受験生、進路指導教諭等の参加者に対し、本学の教育・研究の概要紹介、入学者選抜方法の説明、高校生向けの講演、大学紹介DVDの上映等が行われました。参加者からは、入学者選抜方法、授業内容、学生生活、就職、留学等に関する質問が多く出され、活発な質疑応答が行われました。また、教員による講演は、大学における授業の一端を紹介する内容で、参加者には大変好評でした。



理学部施設見学



教育学部懇談会

# 日本数学コンクール開催

## －小中学生・高校生が難問に挑戦－



数学コンクールの様子

第16回日本数学コンクールと第9回日本ジュニア数学コンクールが、8月14日（日）、情報文化学部を主会場に、東京（玉川大学）、三重（津高等学校・四日市高等学校）、大阪（清風高等学校）の計5会場で開催されました。

日本数学コンクールは、平成2年から高校生を対象に、日本ジュニア数学コンクールは、平成9年から主として中学生を対象に、21世紀の新しい科学技術の基盤を担う夢とロマンを秘めた若者の才能を発掘し、育成していくことを目的として、東海3県の高等学校の数学教師等の協力を得て、例年この時期に開催されています。

今年は、関東地方からの応募者の利便を図るため、町田市の玉川大学でも行われました。また、参加者は、東海地方を中心に、遠くは広島県や徳島県からの計285名で、中には、これまでの最年少となる小学4年の男児もいました。

参加者は、午前10時30分から午後4時までの解答時間中

に、日頃の授業で解く問題とは異なる数学的思考を駆使したユニークな問題に真剣に取り組んでいました。コンクール終了後、参加者からは、「面白い問題だったが難しかった」、「数学の思考を見直すいい機会になった」等の感想が寄せられました。

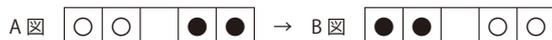
なお、表彰式は、11月3日（祝）、シンポジオンホールで開催され、問題の解説、解答の講評も行われます。

### ◆出題問題◆

- [シニア] 問題1 「白と黒の引っ越し」  
 問題2 「自然数の三角形」  
 問題3 「月の追跡」
- [ジュニア] 問題1 「白と黒の引っ越し」  
 問題2 「敷きつめ」  
 問題3 「あみだくじの横棒」

#### 問題1 「白と黒の引っ越し」

- (1) 白、黒それぞれ2個の碁石が、A図の様に直線上に5個のマスに並べられています。



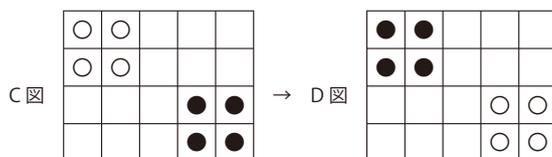
①白も黒も1マスずつ進み、同じマスには1個しか入れない。(交互でなくてもよい)

②異なる色の碁石は1つだけは跳び越えて、2マス先に進むことも出来る。

というルールでB図の状態になるまでの最少回数と、移動の手順を書きなさい。

隙間は1個のままで、白m個、黒n個に増やすと最少回数は何回ですか。またそれはどうしてですか。

- (2) 今度は、白、黒それぞれ4個の碁石がC図のように正方形状に並べられています。



①白も黒も上下左右に1マスずつ進み、同じマスには1個しか入れない。

(交互でなくてもよいが、斜めには進めない)

②異なる色の碁石を1つだけ跳び越えて、2マス先に進むことも出来る。

というルールでD図の状態になるには10回では出来ないことを示してください。

また20回でも無理なことを示してください。

- (3) (2)での出来るだけ少なくすむ回数を求めてください。またその手順を配布される用紙に書いてみてください。

## 第3回国際学術コンソーシアム運営委員会を開催

国際学術コンソーシアム（Academic Consortium 21; AC21）は、7月22日（金）、野依記念学術交流館において、第3回国際学術コンソーシアム運営委員会を開催しました。

この委員会は、今後のAC21の活動やこれまでの活動の評価を主に行う意志決定機関で、AC21メンバー25機関のうち主要なメンバー8機関の代表が集まって毎年開催されています。ここでの議論は、AC21総会に報告され、総会



運営委員会の様子

での審議を経て、全メンバー機関へ連絡されます。

委員会では、議長の山本理事（国際交流担当）による歓迎のことばに続いて、平野総長から激励のあいさつがあった後、AC21本部事務局から、AC21の活動におけるこれまでの評価についての報告がありました。続いて、来年7月にウォリック大学（英国）において開催予定の「AC21国際フォーラム2006」の準備状況に関する報告と開催への協力依頼があり、各委員からは魅力に満ちた内容であると評され、賛同の声があがりました（このフォーラムの詳細及び各種行事への参加については、随時ホームページ[<http://www.ac21.org>または<http://www2.warwick.ac.uk/newsandevents/events/ac21/>]に掲載していきますのでご覧ください。）。その後の各メンバー機関からのAC21の活動に対する発表では、様々な提案があり、これを受けて活発な討議が行われました。最後に、山本理事から議論の総括があり、将来のAC21の活動に係るロードマップが示されました。午後は、「AC21におけるベンチマーキング活動」と題するワークショップが行われ、今後この活動を進めていく上での問題提起や様々な提案がなされ、盛況のうちに終了しました。

## 私立大学関係職員との意見交換会を開催

私立大学関係職員との意見交換会が、8月5日（金）、事務改善合理化委員会の主催で、シンポジオンホールにおいて開催されました。

この意見交換会は、業務改善の一環として計画している私立大学への調査をより効果的に進めるために、私立大学の現状を正確に理解することが必要であること、また、大



意見交換会の様子

学経営という点で私立大学における経営・運営等に対する考え方に触れることにより、本学職員の意識改革を促し、業務改善への取り組みの刺激とすることを目的に開催されたものです。今回は、国立大学と私立大学双方で勤務経験があり、現在もなお私立大学で活躍している方を講師に招くこととし、山梨大学事務局長を務めた後、鶴学園の理事、同学園の広島工業大学の事務局長を歴任し、現在、鶴学園監事である堀道博氏から、「私立大学における経営戦略」と題し、私立大学を取り巻く様々な課題、学校法人経営の特質、財務体質の強化等を中心とした90分間にわたる講演がありました。

講演会には、120名の事務職員が参加し、参加者は、私立大学が少数の事務職員で業務を進め、健全な財務運営を図っていくために、厳しい姿勢で業務運営にあたっていること、また、法人となった国立大学が、私立大学と競争していくため、さらに業務改善を進めていかなければならないこと、そのためには、職員一人一人が意識改革をしなければならないことを実感した講演会となりました。

## 西ヶ廣日本学術会議事務局長を招き 意見交換会を開催

「国際化時代の学術と大学」についての意見交換会が、7月25日（月）、野依記念学術交流館カンファレンスホールにおいて、西ヶ廣日本学術会議事務局長を招き、平野総長をはじめ役員、教育研究評議会評議員、総長補佐、事務企画連絡協議会メンバー等、幹部職員約130名出席のもと開催されました。

意見交換会では、平野総長のあいさつに続き、西ヶ廣事務局長から話題提供として、約40分間にわたり、日本学術会議の設立の経緯と役割、G8学術会議への動き、大学と教育等についての講演がありました。その後、学術会議への要望を含めた活発な意見交換が行われ、盛況のうちに終了しました。



意見交換会の様子

## 技術職員研修（生物・安全管理コース） を実施

今年度の技術職員研修（生物・安全管理コース）が、8月10日（水）から12日（金）までの3日間実施されました。

この研修は、技術職員を対象に、その職務に必要な専門的知識及び技術を習得し、資質の向上と応用能力の開発及び養成を図ることを目的として、昭和59年度から実施されているもので、今年度は、10名の参加を得て、生物、安全管理のコースを開催しました。

1日目は、筏津人事労務課長による「国立大学法人とあって」、浅井直也医学系研究科 COE 特任助教授による「ジーンターゲットマウスとトランスジェニックマウス」、田村良子全学技術センター技術専門員による「痛みと NGF」及び堀木幹夫全学技術センター技術専門員に

よる「名古屋大学法人における安全衛生管理の取り組み」の講義が行われました。2日目以降は、生物コースは、DNAを用いた個人識別、フィールド管理者のための簡易分析システムを用いた土壌診断と作物の栄養診断の2テーマ、安全管理コースは、作用環境測定技術をテーマに3つに分かれ、各々のコースでテーマに沿った事例研修が行われ、研修者にとって有意義な研修となりました。



田村全学技術センター技術専門員による講義の様子

# 家畜バイオ分野の国際産学協同人材育成 —キャリアパス開拓に向けた英国企業との連携—

北川 泰雄 大学院生命農学研究科教授

私の生まれて初めての海外滞在は、農学部附属生化学制御研究施設助手に採用されて3年半後の1979年4月に、米国ニューヨーク州イサカにあるコーネル大学生化学分子細胞生物学科へ長期出張した時である。ボスはドイツ生まれのユダヤ人 Efraim Racker で、世界各国から百余名のポスドクを採用してきた彼の決まり文句は、“The official language in my lab is working English with strong accent. Just speak out without hesitation!” であった。34歳で初めてナマの英語に露出された私がまともに話せるはずがない。初めの半年は英語環境にいただけで強いストレスを受け続けた。しかし「話さなければボスに無視される」ことを悟って、デタラメであっても通じる英語 (working English) をいつの間にかわめていた。この時に身につけた broken English はずっと直っていない。

「こんな俺にしたのは親や教師が悪い」とばかりに、自分の責任で数名の大学院生を担当するようになると、常時1人は1年間の「海外留学」に出すアレンジを続けた。手口はいたって簡単で、研究室を構えている友人(日本人ではない)に「月千ドルでテクニシャンとして雇え」と話をつけただけである。飛行機代は工面してやれないこともあったが、海外の研究室生活に揉まれて、明らかに元気になって帰ってきた。私の指導による研究課題には何の足しにもならなかったが、英会話だけは格段に上達していた。この方法で過去に7人の大学院生を送り出し、彼(彼女)らの多くは大学院修了後に海外に出た。効果は女子学生に目覚ましく、挙げ句の果てにアメリカ人と結婚して永住してしまったり、私よりも高水準の研究を展開して帰国の意志が見えない女丈夫もいる。

「下手だが通じる英語」のおかげで多くの友人

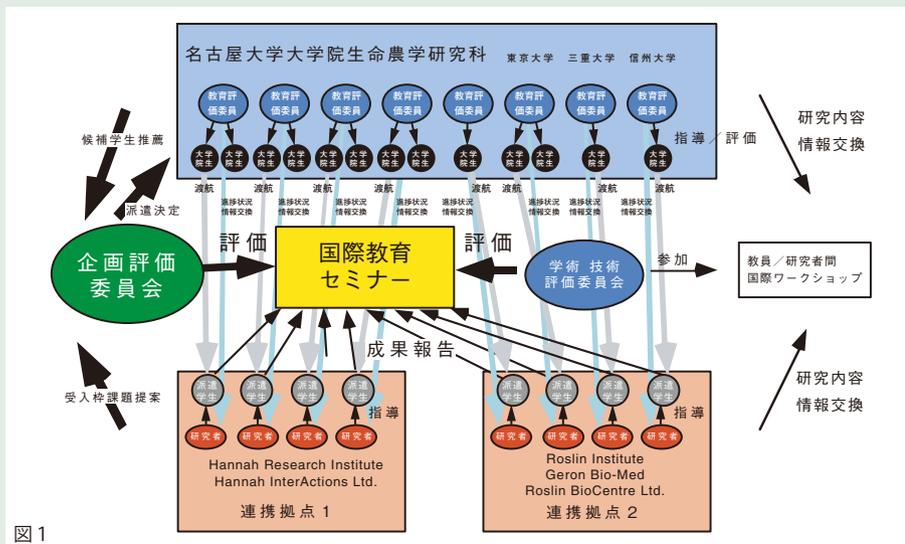
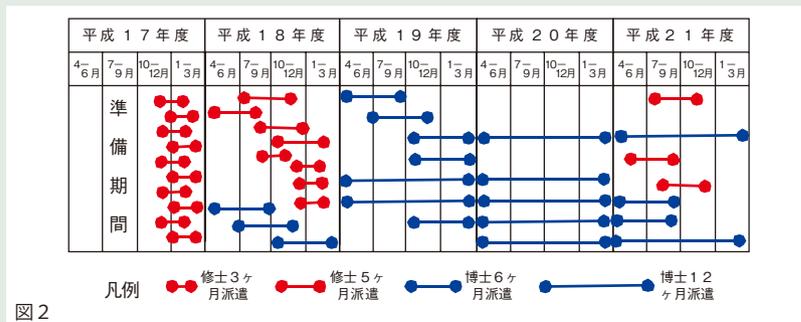


図 1



を海外に作れたが、1997年に名古屋で開いた国際シンポジウムに、クローン羊ドリー作出に関わったスコットランドの研究者達を招いたときにも役に立った。スコッチ生産国の連中は実に酒に強く、陽気でジョーカー杯の「喋り上戸」であった。イギリスの発生学の伝統、ドリー作りの前後日談、そのベンチャー企業化を、何が正気で何が冗談か分からない調子で深夜まで喋り続けた。この時に、デタラメ英会話力と飲酒力で意気投合できた成果は、平成16年度と17年度の名古屋大学総長裁量経費による「家畜幹細胞工学の産学国際研究会」と「家畜バイオテクノロジーの新領域を開拓するスコットランドとの研究会」の連続開催を可能にした。

こんな時に、文部科学省から「派遣型高度人材育成協同プラン公募」が通達された。曰わく「これまでの就業体験や職業意識の形成を目的としたインターンシップとは峻別し・・・新たなコンセプトの事業を大学に委託する・・・」である。「これなら、今までは手作りで、派遣先頼みで、細々とやってきた大学院生派遣が堂々と大々的にできる」と、生命農学研究科長に相談して申請した「家畜バイオ分野の国際産学協同人材育成－キャリ

アーパス開拓に向けた英国企業との連携－」が、幸いにも採択された。その概要は「家畜バイオテクノロジー分野の国際共同研究体制を基盤に、インターンシップと学位授与を融合させた大学院教育の創成を目指して、クローン羊作出などで畜産・酪農科学をリードしている英国のロスリンとハナ研究所、及びこれらからスピンアウトしたベンチャー企業群に大学院学生を派遣して研究に参加させ、国際的教育体制で進歩を評価して、国際的視野の行動力を持つ次世代を育成し、学位取得者の新規キャリアパスを開拓する。」であり、概念図は図1のとおりである。

この計画では、立ち上げの平成17年度には10名の修士課程学生を3ヶ月派遣するが、18年度には夏休み期間を含む5ヶ月に延長すると共に、博士課程学生の6ヶ月派遣を試行する。19年度からは主体を博士課程学生に移し、6～12ヶ月の長期派遣で学術誌に発表できる成果を挙げさせる。20年度からは、成果が望める学生だけを選別して継続派遣する。最終的には、この事業のもとに少なくとも5人の博士学位取得者を育成する。全体の派遣構想を例示すると図2のようになる。

名古屋大学生命農学研究科教授 農学博士

1946年滋賀県生まれ

1974年京都大学大学院農学研究科満了

名古屋大学農学部助手、助教授、教授、名古屋大学生物分子応答研究センター教授、センター長併任を経て現職

趣味：野鳥の写真撮影

きたがわ やすお



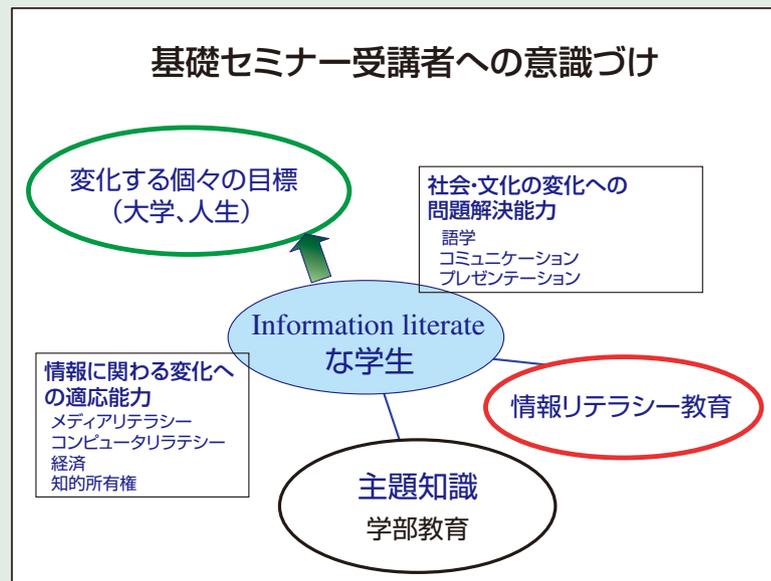
## 全学教養科目「基礎セミナーA：図書館情報リテラシーを身につける」

逸村 裕 附属図書館研究開発室助教授

情報通信技術の急速な進展は大学教育を大きく変えつつあります。入学時点での名古屋大学生のコンピュータに関する知識技能を調べると、インターネットを駆使しハードソフト共にかなり精通している学生からキーボードに触ったことのない学生までさまざまです。高校での教科「情報」の導入により、この多様化はいつそう進むと考えられます。全学教養科目では学生の情報リテラシー底上げのために「情報リテラシー（文系）」と「情報リテラシー（理系）」が用意されていますが、学問の根幹を成す学術情報や文献の情報探索法、図書館の利用方法については、一部を扱っているものの、大学全体としてはいまだ不十分といえましょう。

「Information literacy」という語が米国で登場

したのは1970年代のことです。これは「識字能力あるいは読み書きそろばん」と言い表されていた、「日常生活において必要な基礎能力である機能的リテラシー」を情報化時代に対応させようとしたものです。さまざまな角度からの議論の末、1989年アメリカ図書館協会は「*Information Literacy*とは情報が必要なとき、それを認識し、効果的に発見、評価、利用する能力」と決めました。2003年チェコで開催された国際会議「Information Literacy Meeting of Experts」では *Information Literacy* を「生涯学習における基本的権利であり、情報を同定し、見つけ出し、評価し、組織化し、効果的に創造し、利用し、コミュニケーションする能力と知識」と定義するプラハ宣言が採択されました。



私は2003年度から半期科目「基礎セミナー：図書館情報リテラシーを身につける」を東山キャンパスの文理融合科目として行っています。

「基礎セミナー」の理念は「12名程度の少人数のセミナーという授業形態のなかで、大学生として自立した学習を行なうために必要な、「読む」「書く」「話す」という能力を身に付け、特定のテーマについて学問的に考えることの面白さと、そのために必要な方法を学ぶ科目」です。入学したばかりの理系と文系の学生が参加し、学問の基礎として必要な「読み」（文献調査や資料の収集およびその考察）、「書き」（資料や考察結果のまとめ、図示、報告書の作成）、「話」（発表と討論）の方法を通じて、学問的知識の探究のプロセスとその面白さを体験し、自立的な学習能力を育成することを目標としています。

授業はPCが完備され、多くの印刷体資料にもアクセスの良い中央図書館4階サテライトラボを用いています。内容的には学生が関心を持つよう



最終課題の指導

な幅広いテーマから関連情報を探ること、その検索と評価、問題解決に至るまで多くのトピックを取り扱います。大学院生TAによる細かいサポートそして図書館参考調査掛の協力を得て、レファレンス資料、雑誌記事検索のためのデータベース実習も組み込んでいます。また名古屋アメリカンセンターを訪問し、米国情報の現状、検索と入手についてのレクチャーを受けています。

これらを踏まえ、学期途中にはサーチエンジンを用いた「情報検索実験」を行い、学生の情報探索と情報源評価能力の把握に努め、期末の最終課題には、例えば「大学生の学力低下」といったテーマについての文献探索、書誌の作成、問題解決のためのプレゼンテーションと討議を課し、図に示したような「基礎セミナー」本来の目的を果たそうとしています。

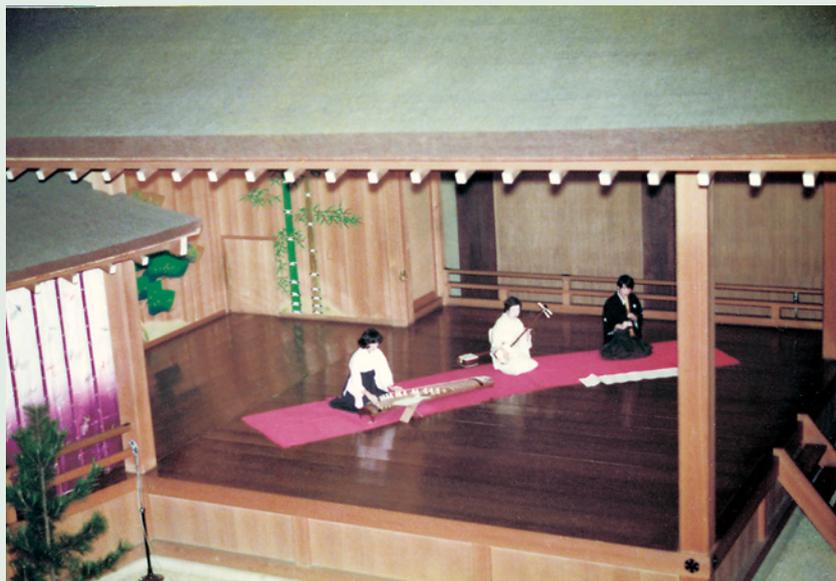
2005年7月29日「文字・活字文化振興法案」が国会にて成立しました。この第六条には「国及び地方公共団体は、文字・活字文化の振興に関する施策が円滑に実施されるよう、図書館、教育機関その他の関係機関及び民間団体との連携の強化その他必要な体制の整備に努めるものとする」と記されています。うがった見方をすれば、文化の基盤である文字・活字が、このような新しい法律で謳わなくてはならないほど、衰退しつつある、という認識があるのかもれません。一部大学生の国語力の低下や読書量の絶無ぶりが世を賑わせています。地道ではありますが、コンピュータと図書館の活用を両輪とする情報リテラシー教育の実践で、情報に主体的に接することができる名大生の能力の涵養に努めていきたいと考えています。

1957年生まれ。1980年慶應義塾大学文学部図書館・情報学科卒業。  
1994年愛知淑徳大学大学院文学研究科図書館情報学専攻博士後期課程単位取得満期退学。  
1980年上智大学図書館員。1991年愛知淑徳大学文学部図書館情報学科助教授、同図書館副館長等を歴任。  
2002年1月より現職。2002年4月より文部科学省研究振興局学術調査官を兼任。  
専門は図書館情報学。学術情報の流通と組織化、情報探索行動研究、ハイブリッド図書館構築。  
趣味：将棋、音楽  
モットー：道は迷ってみるもの

いつむら ひろし



## 滅び行く文化、忘却の音色



能舞台上「夜々の星」を演奏（観世会館、京都市、1975年11月）

中学、高校と運動部にいたせいか、大学では文化的な趣味を得たいと思いギター部のボックスを訪ねることになった。ところが様々なクラブが雑居している朽ち果てた木造建築の廊下で迷い、たまたまドアの開いていた部室を覗いたのが運の尽きであった。ギター部の在処を尋ねるこちらの質問も意に介さず「ちょっと、これ吹いてごらん。」と言われて、尺八なるものを初めて手にした。牛乳瓶を鳴らす要領で息を吹き込むと一応音は出る。おだてられて腰を落ち着けると、そのうち高校の先輩がいることがわかり等々という経緯で、興味も基礎知識も無かった琴古（きんこ）流の尺八を始めることになった。練習したのは譜化宗などの伝統に則り尺八だけで演奏する本曲、三弦や箏との合奏曲、洋楽を取り入れた現代邦楽（当時、青木鈴慕、山本邦山、横山勝也などの若手が邦楽に革命を起こしていた）が主体で、九州流三弦の師匠のもと合奏の稽古に通い、虚無僧で有名な明暗寺で本曲の楽譜を求め、さらにはその名人に教えを請いに行き等々というのが、その後の3年間の生活の中心になった。当時も邦楽はマイナーな分野だったせいか作曲家や演奏家も学生の活動には大変協力的であり、楽譜や録音テープの提供もしばしば受けた。すでに大家であった故杵屋正邦先生のお宅を訪問した際には、時間を割いて京都の学生邦楽の状況を聞いて頂いた上、青木たちが杵屋作品を練習したという広い稽古場を案内して頂き感銘を受けた。

実をいうと名大に着任した際には、邦楽のサークルがあれば顧問になろうという野心を持っていたが、箏曲部もないことにいささか驚いた（名古屋はこの種の芸事が盛んであるにも拘わらず）。

とはいえ、邦楽の凋落はその後止まらず、最近では琴を習う女性も激減して箏曲の師匠ですら生業にならないらしい。津軽三味線や中国の二胡がたまに脚光を浴びることはあっても、邦楽の裾野はやせ細る一方である。私自身も、余暇にはジャズやクラシックを聞いて過ごすことが多く、尺八を手にするのは結婚式の余興かサークルのOB会だけになってしまった。しかし、混んだ通勤電車の中で時々思い出す。私が今でも中指一本で吊革を持つのは、むかし練習場所に困るたび訪れた南禅寺の漆黒の闇の中で、いつの日かまた尺八を思い切り吹くための訓練なのだと。



自宅にて 右が川瀬版琴古流尺八の楽譜、左が明暗流本曲の楽譜

## 看護師として 人として

伊藤美千代  
医学部附属病院7W病棟看護師長

私たち看護師の仕事は、法律では「診療の補助」と「療養上の世話」とうたわれている。実際にはどんなことをしているのか、外科病棟での経験から紹介してみよう。手術の準備で一番大切なのは、患者や家族が、“自分のことは自分で選択し決める”という人としての尊厳を支えることである。

手術は、多かれ少なかれリスクを伴う人生最大のイベントである。時には、生命そのものが危ぶまれることさえある。医師の説明を正しく受け止め自分の意思で納得のいく判断ができているか、看護師にはより患者に近い存在としての関わりが求められる。そのため医師の説明に同席し、患者や家族の様子をみながら、手術への理解の程度や、迷いの有無、意思決定に必要な情報が充分かどうかなどを判断する。必要とあれば医師に説明を求めたり、患者の代弁者になることもある。

手術前に、十分に気持ちの整理ができていたかどうかは治療に大きな影響を与える。家族に勧められて手術に同意したものの本当は怖くてしかなかったTさん。手術後に体中につけられた多くの管で思うように動くこともできず、病状は一

進一退で極度の疲労とストレスがたまっていた。何度も「もう治療はいいです。故郷に帰りたい」と話していた。何とか希望を持てるように回復への見通しを話したりなだめたりと、患者とともに医師や看護師にとっても辛い日々を過ごしていた。ある日、彼女のいったいどこにそんな力があつたのだらうと思う事件が起きた。全ての管を自分で抜き去り、病衣を脱ぎ捨てての逃走。しかし、病室から10メートルも離れていないところで力尽き、「触らないで！もう何もしないで！」と膝をかかえる彼女の痛々しい姿は、私たちの力が及ばなかったことを痛切に批判していた。苦い経験である。

28年間、看護師として働いてきて、多くの患者や家族との出会いや、関わった看護師達の素直で真面目な思いが、宝石のように私の宝物袋にまつまっている。「看護師で良かった。」多くの看護師たちがそう思えるような、患者から「あなたが私の受け持ち看護師でよかった」そういってもらえる看護師が育つ職場が出来るよう日々努めている。



職場にて

いとう みちよ  
1956年8月20日生まれ

## 8. 医学部附属病院 新中央診療棟（第1回）

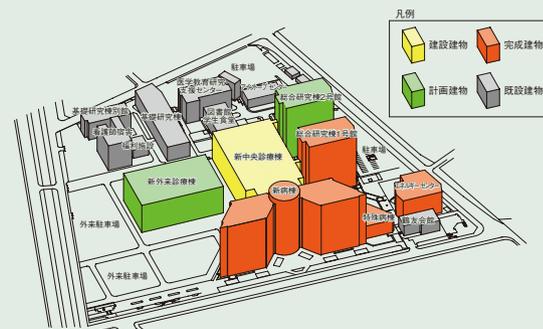


現在、医学部附属病院は、鶴舞団地施設再整備計画に基づき、建物の建て替えを順次行っています。平成5年度から平成7年度にかけて、病棟Ⅰ期（新西病棟と中央コア部分）23,934㎡が、続いて、平成8年度から平成10年度にかけて、病棟Ⅱ期（新東病棟と特殊病棟）18,320㎡が建設され、新病棟42,254㎡が完成しました。入院患者の療養環境に配慮し、「できるだけ多くのベッドに外部に面する窓を」というコンセプトで設計された新病棟は、窓を設けられる外壁面積を多く取ったため、ちょうど鳥が羽を広げたような特徴的な形状となり、鶴舞公園に面したキャンパス南側に建っています。

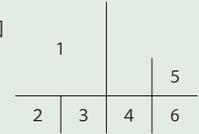
その北側に、このたび、新中央診療棟が建設されました。新中央診療棟は、病院機能の治療部門

（手術部、放射線部、検査部等）、供給部門（滅菌材料、ME機器、備品、血液、電気室、機械室）、管理部門（管理・運営・維持）と、教育病院としての役割を果たすための医学部教育部門の機能を持つ、延べ面積43,612㎡の鉄骨鉄筋コンクリート構造（免震構造）地上7階・地下2階の建物で、平成14年11月から2年8か月の歳月をかけて建設され、今年6月に建設工事が完了しました。今後、平成17年度から平成18年度にかけて医療機器の購入・設置を行い、部門ごとに順次移転する予定です。

新中央診療棟は、鶴舞団地施設再整備計画に基づいて建設されたもので、南側に新病棟、西側に新外来診療棟（予定）、東側には医学部総合研究棟1号館及び2号館（予定）、北側には図書館と



- 1 西側外観
- 2 鶴舞団地
- 3 鶴舞団地将来計画図
- 4 待合いホール
- 5 講堂
- 6 地下1階廊下



基礎研究棟が隣接しています。また、それぞれの建物とは渡り廊下で接続し、機能的な連携が図られるように計画されています。

各階の主な構成としては、地下2階が管理・サービス・設備室、地下1階が放射線部（アイソトープ検査室・高エネルギー治療施設）、1階が放射線部（撮影・透視・アンギオ）・救急部・総合診療部、2階が検査部（生理）光学医療診療部（内視鏡・超音波）・MRI（核磁気共鳴装置）施設、3階が検査部（検体）・病理部・輸血部、4階が中央材料部・周産母子センター・ME機器管理センター、5階が手術部・デイスージャリー、6階がICU・医療情報部・遺伝子・再生医療センター、7階が管理・サービスとなっており、屋上には広域の救急・災害応急医療に対応できるようヘリポートを備えています。

病院機能の最も重要な施設である本建物は、名古屋大学の施設では初めて免震構造を採用しています。予想される巨大地震直後でもその医療機能を維持できるよう、また、災害時には救急医療活動の拠点として機能できるよう建物と地盤の間に免震層を設け、地震の揺れを極力建物に伝えないような構造になっています（なお、他の施設でも地震時に継続的に手術を行うことができた実績があります。）。

建物は、2階を新旧外来診療棟及び新病棟からの患者動線の要とし、患者数の多い内視鏡（胃カメラ・超音波）、検査部（採血・採尿・心電図）、MRI等の各部屋を、外来患者の主動線に沿って配置しました。また、患者が多く訪れるこの場所には吹き抜け空間を作り、待合い時間を少しでも快適に過ごせるよう、また、待合いだけでなく院内コンサートや美術展等多目的に使える開放的な空

間を設けています。

採血検査は、2階で患者から採血した血液をダムウエーター（物品搬送用エレベーター）で3階に運び自動分析装置により血液検査を行います。3階には病理部・検査部・輸血部の各室の他、様々な用途に対応できる約600㎡の講堂があります。この講堂は、医療ガス設備を周囲の壁に備えており、大災害が起こった場合等に患者の処置ができるようになっています。

1階には、一般患者の外来診療棟からの動線の多い放射線部（X線撮影・CT（X線画像）・血管造影）と総合診療部・救急部を配置しました。

また、地下1階には、アイソトープ検査室・高エネルギー治療施設等の放射線防護を必要とする部門を設けています。これらの部屋は、放射線防護のため、床・壁・天井の鉄筋コンクリートの厚さが150cmあり、さらに、高エネルギー治療施設の壁・天井・床には、厚さ50cmの鉄板を鉄筋コンクリートの中に埋め込んであります。

今回は、主に手術部門について紹介します。

（施設管理部）



# モンゴル国で日本法教育研究センター準備室の看板上掲式を挙

●大学院法学研究科



看板上掲式(左から、佐分法学研究科長、平野総長、ナランゲレル法学部長、ガンツォグ総長)

大学院法学研究科がモンゴル国立大学法学部に開室した日本法教育研究センター準備室の看板上掲式が、8月13日(土)、モンゴル国立大学法学部において、本学から、平野総長、杉浦理事、佐分法学研究科長、モンゴル国立大学から、ガンツォグ総長、ナランゲレル法学部長らの出席のもと挙行されました。モンゴル国で日本の大学が現地拠点を開設するのは、初めてのことです。

モンゴル国立大学は、1942年に設立されたモンゴル国を代表する総合大学で、これまでに各界で活躍する多くの人材を輩出し、民主化運動の際にはその拠点にもなりました。現在では、市場経済に適応した人材を育成することが急務となっており、法学部をはじめ全学部でカリキュラムや教育方法の見直しが進んでいます。

日本の大学としては先進的に法整備支援に取り組んできた同研究科は、2000年4月にモンゴル国立大学法学部と部局間協定を締結し、留学生の受け入れ、共同研究の実施、

国際シンポジウムの開催等を行ってきましたが、今回の準備室の開室により協力関係は新たな段階に入りました。準備室は、来年秋の正式な開所式に向けて、日本語教育、日本法図書室、科研費による共同研究の現地拠点、帰国したモンゴル人留学生のためのフォローアップ、日本法教材の出版、モンゴル国の法と社会に関する定点観測等の機能を順次展開していく計画です。また、本学のモンゴル人卒業生が日本語講師兼スタッフとして常駐します。本学とモンゴル国立大学は、全学協定の締結も目指しており、実現すれば準備室は全学的な交流の拠点ともなります。

夜には、本学で学んだモンゴル人卒業生たちや本学卒業生でJICA 長期専門家としてモンゴル国法務内務省で活躍している田邊正紀弁護士(法学部1994年卒)とともに、名古屋大学モンゴル同窓会パーティーを開催し、卒業生との絆を深めました。



日本法教育研究センター準備室の内部



名古屋大学モンゴル同窓会パーティー

## 体験学習「石がいつできたか調べよう! 2005」開催

●年代測定総合研究センター

年代測定総合研究センターは、7月25日(月)から27日(水)の3日間、小学5、6年生と中学生を対象にした体験学習「石がいつできたか調べよう! 2005」を開催しました。

これは、大学の実際の研究と同じように地質調査と室内実験を行い、地球年代学の最先端を体験することを目的に



CHIME 年代測定システムによる年代測定

した企画で、愛知県と三重県の小中学生38名が参加しました。

1日目は、愛知県東部の本宮山に出かけて、岩石の産出状態を調査し、珪線石を含む片麻岩と新鮮な花崗岩の標本を採取しました。参加者は、初めてのハンマーの扱いに苦心しながらも袋いっぱいの標本を持ち帰りました。2日目は、仲井 豊愛知教育大学名誉教授による講義「大陸の山・日本の山」を聞いた後、粉碎した岩石の粉をピーカーの水に懸濁して比重差で選別する水ひ法で、年代測定に使うジルコンという鉱物を分離しました。台風来襲の恐れがあったため、年代測定の準備が終了した午後1時で実習を中断して帰宅しました。3日目の午前中は、「石からわかる日本の歴史」の解説の後、1日目に採取した岩石の薄片と2日目に分離したジルコンの顕微鏡観察、ひる石という鉱物を火であぶって膨張させる実験、1日目に採取した花崗岩構成鉱物をルーベの下で識別分離する実習をしました。午後は、午前中の顕微鏡観察を基に、本宮山の変成岩ができた深さと温度を考え、この変成岩ができた年代をCHIME年代法の計算式を使って求めたところ、本宮山の珪線石片麻岩の形成は約1億2000万年前とわかりました。

## 工学研究科がモノづくり市民公開講座を開催

大学院工学研究科創造工学センターは、7月26日(火)、27日(水)の両日、IB電子情報館において、モノづくり市民公開講座を開催しました。

この講座は、同センターがこれまで学生や教職員を対象に行ってきたモノづくり講座を、一般市民にモノづくりの楽しさ、難しさを実感しながら、自分がイメージした形を



公開講座の様子

作品にする喜びや感動を知ってもらうとともに、本学に親しみを持ってもらうことを目的として、今回初めて一般市民(中学生以上)向けに開催したもので、中学生、主婦、学校の教師等、計13名が参加しました。

今回の講座のテーマは、金属クラフトによる「やじろべ」制作で、参加者が自分で考えたデザインを基に、1枚のはがき大の銅板を素材として作品作りに挑戦しました。全員が初めて経験する金属加工であり、参加者一人一人に同研究科の技術職員が付き添い、技術のアドバイスや工具を使う際の安全について教えました。参加者は、最初は少し緊張していましたが、いつの間にか作品作りに没頭し、完成時には全員の笑顔が見られました。最後に、全員でお互いの作品を鑑賞した後、各々の作品を持ち帰りました。参加者からは、金属加工が楽しかった、本学に親しみが持てた、再度挑戦してみたい等の感想が寄せられるなど好評でした。同センターでは、今後とも市民向け講座の企画を続ける予定です。

## 工学部がテクノサイエンスセミナーを開催 －大学の化学を体験しよう－



実験に取り組む高校生（実験テーマ：イオンを分ける・見る）

工学部は、8月10日（水）、工学研究科新1号館、5号館、共同教育研究施設2号館、総合研究実験棟及びコバルト60γ線照射施設において、高校生を対象に、テクノサイエンスセミナーを開催しました。

このセミナーは、大学の最先端の研究に触れ、実験を通して、研究者と交流する中で科学技術の面白さを感じてもらい、工学に対して新たな興味を持ってもらうことを目的に、平成8年度から毎年テーマを変え開催しているものです。今年度は、化学・生物工学科の教員が担当し、「体験学習：大学の化学を体験しよう」をテーマに、132名の高校生の参加を得て実施されました。

参加した高校生は、今回設定された化学に関する16の実験テーマから選択した2つのテーマについて、午前、午後に分けて、担当教員や大学院学生のアドバイスを受けながら取り組み、化学を学ぶ面白さを体感しました。最後に、参加者全員で反省会を行い、セミナーは終了しました。

## 農業教育公園・農業ふれあい教室 （第3回）を開催

●大学院生命農学研究科附属農場

大学院生命農学研究科附属農場は、今年度の農業教育公園事業の一環として、7月9日（土）、地元小学生とその父兄を対象とした農業ふれあい教室の第3回を開催しました。

今回の教室では、第2回の教室で植え付けをしたポチュラカとゴダカラソウの苗の育ち具合を観察しました。赤土にコンポストを混ぜておくと、コンポストなしの土より苗の成長が早く、ポチュラカの花の数も多くなり、肥料の大切さを知ることができました。続いて、反芻家畜である山羊の反芻胃にカテーテルを挿入して内容液を採取し、顕微鏡を用いて反芻胃に棲息する微生物を観察しました。この観察を通じて、反芻胃に棲息する微生物が植物由

来のセルロースを分解して反芻家畜へ栄養を供給していることを学習しました。小学校では顕微鏡を使用する時間があまりないせいか、予定時間を超えて顕微鏡観察に熱中する小学生もおり、非常に有意義な教室となりました。



自分たちの植えた苗の生長を観察する小学生たち

## 附属農場技術職員が地域貢献事業の 成果について講演

7月28日（木）に京都大学で開催された東海・近畿地域大学附属農場協議会の技術職員による技術等発表講演会において、大学院生命農学研究科附属農場の水野真也技術職員が、附属農場の地域貢献事業として昨年度実施した「農業ふれあい教室－お米を科学する」の成果について講演を行いました。

この教室は、イネの種まき、田植えから稲刈りに至る作業の中で、自然に親しみ、作物を育てる楽しさを体験することを目的として、昨年5月から11月までの間に、毎月1回の割合で計6回開催されたものです。

水野技術職員は、初めに、附属農場における地域貢献事業が、「土曜日が休みとなる小学生を大学で受け入れる」

という文部科学省の方針の下に開始されたこと、それが発展して本学全体の地域貢献事業に組み込まれたこと等の経緯について述べた後、昨年度の地域貢献事業の内容や成果をわかりやすく説明しました。最後に、技術職員として今後も積極的に地域貢献事業に参加したいと述べ、講演を締め括りました。講演後の質疑応答では、参加募集の要領、技術職員の負担、地域貢献事業に対する教員と技術職員の貢献の仕方等について議論が行われました。

## 数学アゴラ夏季集中コース開催

●大学院多元数理科学研究科



講義の様子

大学院多元数理科学研究科は、8月11日（木）から13日（土）の3日間、公開講座「数学アゴラ」の夏季集中コースを開催しました。

このコースは、従来は高校生が対象でしたが、今年から高校教員にも受講の枠を上げたところ、東海3県から、高校生67名、高校教員17名（及び中学生1名）の参加がありました。

「数学とは何か－20世紀の数学はどのような進歩をしたか」（中西知樹同助教授）、「書き換えと計算機」（ジャック・ガリグ同助教授）、「魔方陣と現代数学」（佐藤 肇同助教授）の3つの講義が計8コマ行われたほか、少人数のクラスに分かれて本学の数理学科の学生と懇談する「名古屋大学の学生とのふれあいコーナー」の時間も設けられました。高校で普段学習している数学とは対象も手法もかなり異なる講義内容は、難しい部分もあったようですが、多くの高校生や高校の先生は、熱心に聞き入っていました。

## 「Jr.サイエンス教室：遺伝子を見てみよう」開催

●遺伝子実験施設



顕微鏡で細胞の核や染色体を観察する参加者

遺伝子実験施設は、7月22日（金）、名古屋市とその周辺に在住の小中学生とその父兄を対象に、「Jr.サイエンス教室：遺伝子を見てみよう」を開催しました。

この教室は、子供たちがDNAや細胞に触れる機会をつくり、その中から科学する心や、遺伝学・バイオサイエンス等に対する関心を育ててもらおうという趣旨で開催されているもので、今年で4回目になります。今回は、名古屋市や愛知県内の19の小学校から抽選等で選ばれた児童と父母、あわせて36名が参加しました。参加者は、顕微鏡で細胞の核や染色体を観察した後、ブロッコリーから実際にDNAを抽出しました。小一時間の作業の後、エタノールを注いだ試験管の中からDNAの白い繊維が現れると、あちらこちらで歓声が上がり、全員がDNAの抽出に成功して、実験は無事終了しました。修了式では、石浦施設長から、参加者一人一人に修了証書と記念品が手渡されました。

## 博物館第42回特別講演会開催



講演する鈴木年代測定総合研究センター長

博物館は、7月21日（木）、第8回特別展「時を測る－地球誕生から中世まで」に関連する特別講演会の最終回として、鈴木年代測定総合研究センター長による「名古屋大学で開発した CHIME 年代測定法」と題する講演会を開催しました。

鈴木教授は、まず、元寇の碇石を例に、年代測定の原理と手法の話から始め、元の軍船が装備していたとされる碇石について、石の年代は CHIME 法、石を固定していた木や竹の年代は放射性炭素法で別々に決定し、2種類の年代測定結果を組み合わせて、長く未解決であった碇石の起源を解明した研究プロセスをわかりやすく解説しました。続いて、世界に先駆けて本学で開発した CHIME 年代測定法の話に移り、新しい研究手法の開発には、長期にわたる関連基礎研究と既存概念にとらわれない柔軟な発想が大事であると強調し、参加者は年代測定研究の幅の広さと奥深さを実感していました。

## 第6回博物館企画展「核分裂絵巻」開催中

博物館は、8月6日（土）から10月7日（金）まで、第6回企画展「核分裂絵巻－ベルリン・ヒロシマ・21世紀」を開催しています。

この企画展は、今年が広島と長崎に原子爆弾が投下されてから60年、ラッセル－アインシュタイン宣言が出されてから50年という節目の年に当たることから企画されたもので、核エネルギーの扉を開いた核分裂反応が1938年12月にドイツで発見された後、1945年8月に原爆として戦争に使われていった歴史が、外山茂樹名誉教授によって描かれた34枚の水彩画とコラージュによって分かりやすく展示されています。また、核分裂研究の歴史だけではなく、日本とドイツの科学交流やドイツのキュリー夫人と呼ばれながらも長く正当に評価されなかった女性科学者リーゼ・マイトナーにもスポットが当てられており、1933年にリーゼ・マイトナー博士と理化学研究所の仁科芳雄博士の間で交わされた3通の書簡の写しが特別に展示されています。さらに、原爆投下の2か月後に原子爆弾災害調査研究特別委員会の地学班



企画展を見学する大学説明会参加の高校生

長であった東京大学の渡邊武男先生（1968年から3年間、本学理学部地球科学科教授）によって、広島と長崎で採取された被爆瓦と被爆岩石が、調査時の写真とともに展示されているなど、充実した内容となっています。

今回の企画展では、これまでの特別展や企画展に比べ、太平洋戦争を知らない比較的若い世代の入館者が目立っています。特に、8月9日（火）から11日（木）に行われた名古屋大学説明会の際には、500名を超える高校生が見学に訪れました。

また、8月8日（月）に開催された企画展に関連する第1回の講演会では、Hans-Peter Duerr ミュンヘン大学名誉教授が、「ラッセル－アインシュタイン宣言から50年：新たな道の模索」と題して、核兵器廃絶のために我々が何をすべきかについて力強く講演しました。講演会終了後も、外国人の参加者を中心に、Duerr ミュンヘン大学名誉教授、外山名誉教授との議論が30分以上続き、この問題に対する関心の高さを伺わせました。



講演する Duerr ミュンヘン大学名誉教授



展示室で足立博物館長と意見交換する Duerr ミュンヘン大学名誉教授

## 生物機能開発利用研究センターが 公開実験講座を開催

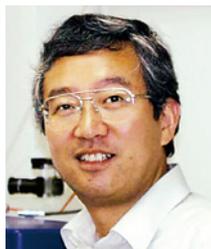


マイクロピペッターで小さなチューブに試薬を入れる作業を行う受講者

公開実験講座2005「バイオサイエンス・バイオテクノロジーを体験する」が、8月6日（土）、7日（日）の2日間、生物機能開発利用研究センターで開催されました。

今回の実験講座には、高校生や社会人計21名の参加があり、DNAでみるメダカの地域差、自分の遺伝子を見てみよう、コメの食味とDNAの3コースに分かれ、熱心に実験に取り組みました。メダカや自分の口腔内の組織、イネ等の材料からDNAを抽出したり、試薬をマイクロピペッターで小さなチューブに入れたり、遺伝子増幅装置のスイッチをオンにし、最後に得られた電気泳動のバンドパターンに頷いたり、首をひねったりする受講者の姿が見られました。また、受講者からは、学校の授業やマスコミ等を通して知っていたバイオサイエンスやバイオテクノロジーを実際に体験できてよくわかった、大学の研究の現場というものが少しわかったという感想も聞かれました。

### ●広報室長



渡辺 芳人  
(わたなべ よしひと)

専門分野：生物化学、生物有機科学

#### 〈略歴〉

昭和62年3月 慶應義塾大学助手（医学部）  
昭和62年12月 慶應義塾大学講師（医学部）  
平成元年4月 通商産業技官  
平成2年10月 京都大学助教授（工学部）  
平成6年10月 岡崎国立共同研究機構教授  
（分子科学研究所相関領域研究系）  
平成13年2月 岡崎国立共同研究機構教授  
（統合バイオサイエンスセンター）  
平成14年4月 名古屋大学教授（大学院理学研究科）  
平成16年4月 名古屋大学総長補佐（資源配分担当）（～H17. 3. 31）  
平成17年4月 名古屋大学総長補佐（財務担当）（～H17. 7. 31）  
平成17年8月 名古屋大学総長補佐（財務・広報担当）（～H18. 3. 31）  
平成17年8月 名古屋大学広報室長（～H18. 3. 31）

### ●リスク管理室長



山下 廣順  
(やました こうじゅん)

専門分野：宇宙物理学

#### 〈略歴〉

昭和43年4月 名古屋大学助手（理学部）  
昭和54年8月 大阪大学助教授（理学部）  
平成2年4月 宇宙科学研究所教授（共通基礎研究系）  
平成4年10月 名古屋大学教授（理学部）  
平成8年4月 名古屋大学教授（大学院理学研究科）  
平成12年1月 名古屋大学大学院理学研究科長（～H14. 12. 31）  
平成16年4月 名古屋大学理事（総務関係担当）・副総長  
平成17年4月 名古屋大学理事（総務・企画関係担当）・副総長  
（～H18. 3. 31）  
平成17年8月 名古屋大学リスク管理室長

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成17年7月16日～8月15日]

記事	年月日	新聞等名
1 留学生は見た！おらがバビリオン：クハー・ダリボオルさん・本学学生の見たチェコ館 ユニークだが、抽象的で「無国籍」に感じる	7.16 (土)	毎日 (朝刊)
2 南極に学ぼう：上田豊・環境学研究科教授は南極の氷の中に閉じこめられていた34万年前の大気の解析を進めており、「10万年周期で変化を繰り返してきた過去の気候のメカニズム解明に大きく貢献するだろう」と話す	7.18 (月)	読売
3 大学発起業、経営の荒波：上田実・医学系研究科教授は「大学発ベンチャーは、大学の組織の旧弊を壊す試みで「光と影の部分があるだろうがやる価値がある」と話す また、大学発ベンチャーを支援するNPO バイオものづくり中部事務局長・武田穰・農学国際教育協力研究センター助教授は「堅実な成長プランを持つことが必要」と話す	7.18 (月)	中日 (朝刊)
4 文部科学省は2003～2007年度の「大学知的財産本部整備事業」採択43機関の中間評価を行う 本学はA評価	7.19 (火)	日刊工業
5 「名古屋の将来を語る懇談会」(座長・松尾稔・本学名誉教授)の初会合が18日開催 林良嗣・環境学研究科教授は人口減少社会の到来に触れ、「選択と集中」による土地利用を提唱	7.19 (火) 7.20 (水)	中日 (朝刊) 読売
6 大学発ベンチャーの挑戦：サーモフォーミングテクノロジー 篠田剛・工学研究科教授が開発した摩擦熱による接合技術の事業化を目指す	7.19 (火)	日刊工業
7 ときめき時日記：深津将史さん・本学学生 1年中合宿、練習あるのみ	7.19 (火)	中日 (朝刊)
8 第35回名大サロン：29日に宇澤達・多元数理科学研究科が「数と空間の話」と題して講演	7.19 (火)	中日 (朝刊)
9 「夢化学21」の大学化学実験体験 本学では8月10日に工学部化学・生物工学科で開催	7.19 (火)	中日 (夕刊)
10 理化学研究所理事長・野依良治・本学特別教授は、「未来を担う君たちへ」と題して、神戸市灘区で講演 「謙虚に自利心を持って生きよう」と子どもたちにメッセージ	7.20 (水)	日刊工業
11 理系白書 私の提言：村上隆・教育発達科学研究科教授 センター試験を大学受験資格試験に	7.20 (水)	毎日 (朝刊)
12 新エネルギー・産業技術総合開発機構は、2005年度第1回「大学発事業創出実用化研究開発事業」の助成事業に、本学の「ストレッチ刺激負荷3次元培養システムの開発」(資金提供企業：ストレッチクス)など計42件を採択	7.20 (水)	日刊工業
13 工学部主催の「テクノフロンティアセミナー」参加者募集 高校生対象で8月17～19日の2泊3日、グループに分かれて実験を行う	7.20 (水)	中日 (朝刊)
14 名古屋歴史科学研究会の例会23日開催 本学学生らが研究発表を行う	7.20 (水)	中日 (朝刊)
15 石原一彰・工学研究科教授らのグループは、有機化合物を触媒に、ナイロン原料のラクタムを合成する技術を開発	7.21 (金)	日刊工業
16 科学技術振興機構は、独創的シーズ展開の大学発ベンチャー創出推進事業の2005年度新規採択課題として、大澤俊彦・生命農学研究科教授の「アゾポリマーを利用した『抗体チップ』の作製と食品機能評価への応用開発」など30件決定	7.22 (土)	日刊工業
17 ばーそん：球脊髄性筋萎縮症の原因を解明し、治療法を見つけた業績が評価され、日本神経科学学会の時実利彦記念賞を受賞した祖父江元・医学系研究科教授は、「神経変性疾患も『早期発見、早期治療』の時代がくるはず」と語る	7.22 (土)	朝日 (朝刊)
18 レーザー：生田幸士・工学研究科教授は、日本の医療機器メーカーが治療装置の開発に消極的であることを挙げ、ハイリスクな開発を避ける企業姿勢を非難	7.22 (土)	日刊工業
19 農業・生物系特定産業技術研究機構の生物系特定産業技術研究支援センターは、2005年度の委託研究として、若松祐子・生物機能開発利用研究センター教授の「核移植と染色体操作を組み合わせた新規手法による魚類体細胞クローンおよび遺伝子ターゲティング技術の開発」など計31課題を採択	7.25 (月)	日刊工業
20 日本神経科学学会は26日、時実利彦記念賞を祖父江元・医学系研究科教授に授与 受賞業績は「運動ニューロン疾患の病態解明と治療への新たな展開」	7.26 (火)	中日 (朝刊)
21 大幸財団は、2005年度の学術研究助成先に原田正康・理学研究科教授の「有限温度・有限密度QCDにおけるカイラル相転移とハドロンの性質の研究」など7件を採択	7.26 (火)	中日 (朝刊)
22 学生街ダンス：漆畑祐佳さん・本学大学院生 中日詩祭での授賞式で賞状の言葉に詩魂を感じた	7.26 (火)	中日 (朝刊)
23 ときめき時日記：深津将史さん・本学学生 エイトも“9人で漕ぐんだ”	7.26 (火)	中日 (朝刊)
24 本学と国際学術コンソーシアムの共催で「第1回AC21学生世界フォーラム」を7月29日～8月9日に開催 愛知万博にちなみ、世界18大学の学生代表が「人間と自然の共存」をテーマに議論	7.26 (火)	朝日 (朝刊)
25 本学発ベンチャー企業「ファイン・バイオメディカル」(池田誠一さん・本学大学院生)は、脳血管の構造・触感を再現した立体モデルを商品化 10月から病院やメーカー向けに売り出す	7.27 (水)	日経 (朝刊)
26 経済教室：大学淘汰の時代 社会の要請、真剣に探れ 潮木守一・本学名誉教授	7.28 (木)	日経 (朝刊)
27 豊川キャンパスにある太陽地球環境研究所の本部機能を来年4月から3年間で東山キャンパスへ移転統合すると発表	7.29 (金)	中日 (朝刊)
28 新設するフェローの第1号に中国東北大学の赫冀成学長 8月5日の21世紀COEシンポジウム「自然の叡智に学ぶ“ものづくり”」の中で授与式を行う	7.29 (金)	毎日 (朝刊)
29 工学研究科の堀勝研究室は、愛・地球博で29日～8月8日に開かれる「科学と遊ぶ体験ひろば」にプラズマ状態を実現できる小型大気圧非平衡プラズマ装置「μ-AP」を展覧	7.29 (金)	日刊工業

## 本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成17年7月16日～8月15日]

記事	月日	新聞等名
30 環境医学研究所は、8月21日、シンポジオンホールでアルツハイマー病の市民公開講座を開催	7.29 (金)	中日 (朝刊)
31 バグウォッシュ会議27日閉幕 自然科学系の研究者の参加減る 沢田昭二・本学名誉教授は「この傾向は、ますます強まるのではないかと参加意欲の低下を懸念	7.29 (金)	朝日 (夕刊)
32 豊田工業高等専門学校校長・末松良一・本学名誉教授は、ロンドンの大英博物館で「日本ロボットのルーツ・カラクリ」と題し講演	7.30 (土)	中日 (夕刊)
33 読売新聞特別講座 本学では法学研究科の後期講座でアジアからの留学生を対象にした英語による読売講座「記者が見る世界、アジア、日本」がスタート	7.30 (土)	読売
34 留学生は見た！おらがパピリオン：マウラニ・メガ・ハブサリさん・本学学生の見たインドネシア館 島々の多様性をバランスよく見せている	7.30 (土)	毎日 (朝刊)
35 芸術を学ぶスペインとメキシコの学生8人が日本の学生8人とともに作品を制作するプロジェクト「くつをぬいで。」の展覧会が名古屋芸術大学と野依記念学術交流館で8月4日まで開催	7.31 (日)	中日 (朝刊)
36 備える：「到達前地震警報」の実用化に災害対策室が取り組んでいる 林能成・災害対策室助手は、課題とされる観測精度の向上について、「過度に期待するのではなく、これをどう判断し、どう役立てるかが大切」と話す	8. 1 (月)	中日 (朝刊)
37 時のおもり：池内了・本学名誉教授 不確定な数値見極めよ	8. 1 (月)	中日 (朝刊)
38 篠原久典・理学研究科教授らは、東京工業大学と共同でフラーレン分子1個のナノスイッチ動作に成功	8. 2 (火)	日刊工業
39 新入生を対象としたユニークな授業「基礎セミナー」 近田政博・高等教育研究センター助教授は、受験モードで凍った心を解きほぐす「解凍」をセミナーのキーワードに挙げる	8. 2 (火)	中日 (朝刊)
40 マンモスのミトコンドリア DNA の配列を解明した小澤智生・環境学研究科教授 絶滅の謎、解明に前進	8. 2 (火)	日経 (朝刊)
41 万博記念国際フォーラムを7日豊田講堂で開催 中村桂子・JT生命誌研究館長や石丸典生・デンソー特別顧問らが講演	8. 2 (火) 8. 9 (火)	中日 (朝刊) 読売
42 21世紀 COE シンポジウム「自然の叡智に学ぶ “ものづくり”」5、6日開催 2日間で13の講演、6日午後には38件の研究成果をポスターやパネルで展示	8. 2 (火) 8. 6 (土)	中日 (朝刊)
43 本学学生サークル・民族舞踊団「音舞」 和太鼓や扇の舞、祭り大好き仲間	8. 2 (火)	中日 (朝刊)
44 ときめき時日記：深津将史さん・本学学生 ミサンガに誓った勝利	8. 2 (火)	中日 (朝刊)
45 アイシン精機や名古屋市工業研究所などと共同で自動車制御用組み込み OS の共同開発を開始 高田広章・情報科学研究科教授は、「中部発で次世代自動車制御 OS の世界標準を狙いたい」と話す	8. 4 (木) 8. 9 (火)	日経 (朝刊) 朝日 (朝刊) 中日 (朝刊)
46 本学や東京大学などの共同チームが月表層砂の分析データを再検討した結果、太陽風由来ではない成分について地球の元素成分と酷似していることが判明 磁場がない状態の地球から月へと輸送されたと推定される	8. 4 (木)	日経 (朝刊) 日刊工業
47 生田幸士・工学研究科教授は、治療や検査時の人体への負担を極力減らす低・無侵襲治療実現に向けて、素材から医療ツールとなるマイクロマシンまでを自らの手で開発 「子どもたちに夢を与えられる技術を開発したい」とあくなき挑戦を続ける	8. 4 (木)	日刊工業
48 経済教室：都市の未来 郊外撤退と市街地再生 林良嗣・環境学研究科教授	8. 4 (木)	日経 (朝刊)
49 文部科学省の調査研究協力者会議の報告書によると国立大学のコスト削減進む 本学では部局ごと契約だったエレベータ保守点検を一元化、メーカー別一括契約や3年契約への変更などで経費を抑えた	8. 5 (金)	日刊工業
50 学生記者奮闘中：伊藤由華さん・本学3年生 カナダ館では異文化認め平和の道へ	8. 5 (金)	読売
51 留学生は見た！おらがパピリオン：エリツァ・マリノワさん・本学学生の見たブルガリア館 人気のヨーグルト「高すぎ」	8. 6 (土)	毎日 (朝刊)
52 21世紀 COE プログラム「計算科学フロンティア」社会連携フォーラムの一環として、現役宇宙飛行士アレクサンダー・カレリ氏を招き、「ロシア宇宙飛行士を囲んで宇宙飛行について語る会」8日開催	8. 6 (土) 8. 7 (日)	中日 (朝刊) 朝日 (朝刊)
53 8月26日開催の白川郷世界遺産10周年記念「白川郷国際シンポジウム～世界遺産で暮らす～」の参加者募集 パネルディスカッションに森川高行・環境学研究科教授参加	8. 6 (土) 8.11 (木)	朝日 (夕刊) 朝日 (朝刊)
54 第1回 AC21学生世界フォーラム2005は、最終日の6日、「自然と人間の共生のための共同宣言」を発表し、閉幕	8. 7 (日)	毎日 (朝刊) 読売
55 ホンダの研究開発子会社であるホンダ・リサーチ・インスティテュート・ジャパンと共同でイネの培養特性を向上させる遺伝子を発見 この遺伝子を交配によって培養が容易なイネの遺伝子と入れ替えることで、培養しやすい「コシカリ」の開発にも成功	8. 9 (火)	毎日 (朝刊) 他5社
56 文部科学省は、人材育成プロジェクト「派遣型高度人材育成協同プラン」として、本学などが提案する「家畜バイオ分野の国際産学協同人材育成」など20件のプロジェクトを選定	8. 9 (火)	日刊工業
57 名大サロンの主役：宇澤達・多元数理科学研究科教授が「数と空間の話」と題して講演 乳児や動物にも「数覚」ある	8. 9 (火)	中日 (朝刊)
58 ときめき時日記：深津将史さん・本学学生 4年ぶりの勝利に酔う	8. 9 (火)	中日 (朝刊)

## 本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成17年7月16日～8月15日]

記事	月日	新聞等名
59 書評：「飄々楽学」大澤文夫・本学名誉教授著	8. 9 (火)	中日 (夕刊)
60 環境学研究科主催の万博記念国際シンポジウム「私たちは人間生活と環境の未来を構想できるのか？」6日開催 川田稔・環境学研究科教授らの基調講演や児玉逸雄・環境医学研究所長らによるパネルディスカッションなど	8.10 (水)	中日 (朝刊)
61 訃報：久村因・本学名誉教授	8.11 (木)	中日 (朝刊) 読売
62 国際開発研究科の院生らが今年1月に結成した「名大津波被災者支援院生有志会」が10日、スマトラ沖地震で被災した子どもたちの奨学金として在日インドネシア・アチェ州民協会に義援金贈る	8.11 (木)	中日 (朝刊)
63 名古屋中小企業投資育成と十六銀行、名古屋銀行、百五銀行、中小企業基盤整備機構は、中部地域を主対象とするベンチャー育成ファンドを共同設立 投資の第1弾として、本学発バイオベンチャー企業「セクシグナルズ」に出資	8.12 (金)	日経 (朝刊) 中日 (朝刊)
64 東海地方7月の地震：林能成・災害対策室助手	8.12 (金)	読売
65 留学生は見た！おらがパピリオン：センニャンゲ・ベン・ジワさん・本学学生の見たウガンダ コーヒーの楽しみ方の違い比べられたら	8.13 (土)	毎日 (朝刊)
66 平成17年度名古屋大学公開講座 「情報が世界をつくる！」をテーマに8月23日～10月11日までの火・木曜日に開催	8.13 (土)	朝日 (朝刊)
67 名古屋帝国大学医学部（現・本学医学部）を1945年に卒業した学生の同級会「焼筍会」は、戦後60年の今年を区切りに総会の開催と会報の発行を打ち切る	8.14 (日)	中日 (朝刊)
68 公開気象講座 26日にシンポジオンホールで開催	8.14 (日)	読売
69 本学と名古屋市工業研究所などの共同研究グループは、生活排水などを高度処理して循環させ、再利用するシステムを開発し、「愛・地球賞」に選定される この開発により、安全で高品質な処理水を省エネルギーで短時間に作成することが可能となった	8.15 (月)	朝日 (朝刊)
70 高校生対象の「第16回日本数学コンクール」と小中学生対象の「第9回日本ジュニア数学コンクール」 14日に本学を主会場に、三重、東京、大阪の4会場で開催	8.15 (月)	中日 (朝刊)

# 名古屋大学ホームカミングデイ

本学では、10月23日（日）に、全学同窓会の共催を得て、「名古屋大学ホームカミングデイ」を東山キャンパスで開催することになりました。

この行事は、卒業生・修了生、学生、現旧教職員等の本学関係者や学生のご家族、地域の方々等に、本学の種々の

活動に関する情報を発信するとともに、交流の場を提供し、大学の活動を理解していただくことなどを目的に開催するものです。

楽しい一日をお過ごしいただけるよう、準備を進めておりますので、ご家族、ご友人とお気軽にお越しください。

## プログラム

### 午前の部

10:00～	名古屋大学紹介（経済学部カンファレンスホール） 教育担当理事挨拶、ビデオによる大学紹介 大学関係者との懇談
10:00～12:00	学部・研究科行事、部局同窓会・学科同窓会行事
10:00～14:00	施設見学、研究・教育紹介 博物館、附属図書館、広報プラザ、豊田講堂ロビー、野依記念学術交流館など
昼食 生協食堂等をご利用ください。	

### 午後の部

14:30～15:00	ホームカミングデイ開行事・全学同窓会総会（豊田講堂） 総長挨拶 全学同窓会会長挨拶 報告事項
15:00～16:00	講演会「F1の楽しみ方」（豊田講堂） 講師 トヨタ自動車(株)相談役・(株)デンソー副会長 齋藤明彦氏
16:00～16:30	演舞会等（豊田講堂） 学生、クラブによる演舞等
17:00～18:30	懇親会（シンポジオンホール） 学生、クラブによるアトラクション

## 学部・研究科行事

教育学部・教育発達科学研究科	学部紹介、懇談	
法学部・法学研究科	講演会、施設見学	
経済学部・経済学研究科	研究・教育内容の紹介	
情報文化学部	概要説明、研究活動紹介	
理学部・理学研究科	学科別ミーティングと研究室公開	
医学部・医学系研究科	講演会	（野依記念学術交流館）
農学部・生命農学研究科	概要説明、懇談、研究室公開	
多元数理科学研究科	懇談	

## 部局同窓会行事

文学部・文学研究科同窓会	同窓会秋期サロン／昼食会、講演会など	（文学部大会議室）
理学部・理学系研究科同窓会	同窓会総会、懇親会（軽食）	（野依記念物質科学研究館）
情報科学研究科同窓会	昼食会	（北部食堂「ゆ〜どん」）

## 学科同窓会行事

名原会（工・量子エネルギー工学分野）	同窓会総会	（工学部6号館会議室 予定）
--------------------	-------	----------------

## 参加費

無料（懇親会に参加いただけます場合は、会場にて懇親会費を集めさせていただきます。）

※プログラム等の最新の内容は、名古屋大学ホームページ（<http://www.nagoya-u.ac.jp/home-coming-day>）に掲載していきますので、ご覧ください。

※ご来場には可能な限り公共交通機関をご利用ください。

## お問い合わせ

名古屋大学総務企画部総務広報課

電話：052-789-5759

E-mail：home-coming@post.jimu.nagoya-u.ac.jp

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

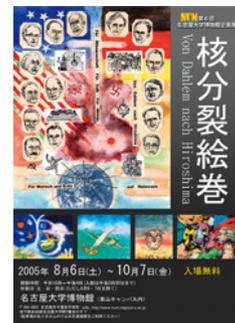
**8月6日(土)～10月7日(金)**

場 所：博物館  
開館時間：10時～16時  
休 館 日：土・日曜日・祝日  
入 場 料：無料

[問い合わせ先]  
博物館事務室 052-789-5767

**第6回名古屋大学博物館企画展**

テ ー マ：核分裂絵巻



**9月10日(土)～3月4日(土)**

場 所：経済学部カンファレンスホール  
時 間：10時～12時  
対 象：中学生・高校生とその保護者、  
教育関係者、社会人  
回 数：10回

[問い合わせ先]  
大学院経済学研究科エクステンション・  
サービス  
052-788-6197

**オープン・カレッジ 自由奔放！サイエンス**

<http://www-oc.soec.nagoya-u.ac.jp/>



**9月27日(火)**

場 所：高等総合研究館カンファレンスホール  
時 間：17時～

[問い合わせ先]  
研究協力・国際部研究支援課高等研究院掛  
052-788-6051

**第11回高等研究院セミナー**

講演者Ⅰ：芝井 広理学研究科教授 (高等研究院流動教員)  
「世界初の遠赤外線干渉望遠鏡の開発」  
講演者Ⅱ：八島栄次工学研究科教授 (高等研究院流動教員)  
「超構造らせん」



**9月28日(水)～9月30日(金)**

場 所：農学部第7講義室

[問い合わせ先]  
松本哲男農学国際教育協力研究センター教授  
052-789-4240

**大学院生命農学研究科一般向け2005年度集中講義**

テ ー マ：国際開発論～国際協力銀行の業務経験を通じて～  
講 演 者：澤井克紀農学国際教育協力研究センター客員教授  
(国際協力銀行プロジェクト開発部次長)

**10月4日(火)～6日(木)**

場 所：文系総合館7階オープンホール  
時 間：12時10分～12時50分

[問い合わせ先]  
高等教育研究センター事務室  
052-789-5696

**高等教育研究センター第2回ランチタイム FD**

10月4日(火) 授業をデザインするときの7つのポイント  
(中井俊樹高等教育研究センター助教授)  
10月5日(水) 学生の学習意欲を高めるような教授法とは？  
(夏目達也高等教育研究センター教授)  
10月6日(木) 大学生はどのように学び・発達するのか？  
(近田政博高等教育研究センター助教授)  
\*若手・新任の先生、授業の進め方に困っている先生を歓迎します。  
\*ランチは持ち込み可。お茶・コーヒーをご用意します。

**10月7日(金)**

場 所：博物館講義室  
時 間：15時～16時30分

[問い合わせ先]  
博物館事務室 052-789-5767

**第46回名古屋大学博物館特別講演会**

講 師：外林秀人マックスプランク研究所教授  
演 題：広島で原爆体験、そしてドイツから学ぶこと

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

## 10月15日(土)

場 所：大学院生命農学研究科附属農場  
内農業館

時 間：14時～16時

定 員：60名

参 加 費：無料

## 地域貢献特別支援事業「都市近郊の農業教育公園」講演会

講 演 者：大澤俊彦生命農学研究科教授

演 題：健康と食生活

[問い合わせ先]

大学院生命農学研究科附属農場事務掛

0561-37-0210

## 10月21日(金)～11月11日(金)

場 所：中央図書館4階展示室

時 間：10時～17時

## 附属図書館2005年秋季特別展

テ ー マ：知の万華鏡—書物からみた18世紀の西洋と東洋—

[問い合わせ先]

附属図書館情報管理課庶務掛

052-789-3667

## 10月31日(月)～11月2日(水)

場 所：野依記念学術交流会館会議室

時 間：9時～18時(10月31日・11月1日)  
9時～15時30分(11月2日)

参 加 費：無料

## 農学国際協力日米大学連携セミナー

テ ー マ：農学国際協力における日米大学の連携をめざして

Approach to collaboration between the Universities in Japan and the United States in International Agricultural Cooperation

内 容：発展途上国の農学分野の国際協力に携わる日米の大学・研究機関と、援助機関の専門家が、それぞれのこれまでの取り組み事例を発表し、経験を交換する。日米それぞれ10大学程度と3機関、省庁の関係者、およそ30名が公開で途上国の状況に応じた大学のより効果的な取り組み方について議論し、アジア、アフリカにおける両国の協力・連携の可能性について対話を行なう。

[問い合わせ先]

松本哲男農学国際教育協力研究センター  
教授

052-789-4240

名大トピックス No.148 平成17年9月15日発行

編集・発行/名古屋大学広報委員会

本誌に関するご意見、ご要望、記事の掲載などは広報室にお寄せください。

名古屋市千種区不老町(〒464-8601)

TEL. 052-789-2016 FAX. 052-789-2019 E-mail kouho@post.jimu.nagoya-u.ac.jp

表紙

夏休みの豊田講堂  
(平成17年8月18日撮影)



名大トピックスのバックナンバーは、名古屋大学のホームページ

(<http://www.nagoya-u.ac.jp/topics/>) でもご覧いただけます。

## 41 NUマーク 一名大の学章

図案化された Nagoya University の「NU」に、篆書体の「名大」を合わせた、通称NU（エヌ・ユー）マークは、名大の象徴たる学章として、学生バッジや学旗、印刷物、名大グッズなどに広く用いられています。

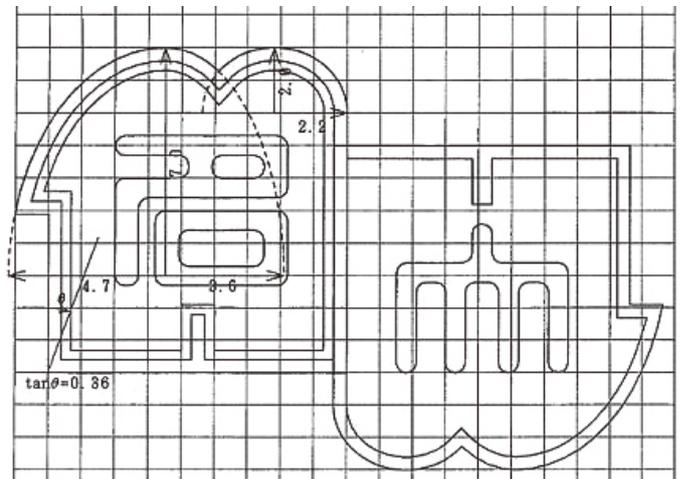
このNUマークが公式に名大の学章になったのは最近のことで、1998（平成10）年に「名古屋大学学章取扱要項」が定められてからです。さらに今年3月には、「名古屋大学学章規程」が制定され、図案のサイズや字の傾き具合も決められています（図2）。色の部分は、本来は黒ですが、名大の尊厳や品位を損なわなければ、名大カラーの濃緑をはじめ特に制限はありません。

ただこのマークは、公式化される以前から長く使われてきたものです。もともとは学生バッジのデザインですが、バッジとしてはそれ以前から、1953（昭和28）年に開学記念行事として記念祭実行委員会が募集選定した、通称シャチバッジ（図3）がありました。その他にも、黒地に金文

字で「名大」と書いた業者製作のバッジも使われていたが、いずれもデザイン的に評判がよいとはいえなかったようです。

そこで1958年には、学生部の発案で新しい学生バッジが作成されることになりました。名古屋大学学生バッジ選定委員会が組織され、図案の学内公募が行われました。その結果、68点もの応募の中から、教養部（法）2年の北川英之君の作品が選ばれ、これをもとにしてNUバッジが作られたのでした。

この頃、1954年から56年にかけて、「若草もゆる」、「大空に光はみてる」、「若き我等」と、現在でも歌われている学生歌、応援歌も学内募集であいついで選ばれています。1949年に新制大学としてスタートしながらも、施設が各地に分散する「タコ足大学」であった当時、こうしたバッジや歌は、名大生としての一体感を形として示す、数少ないものだったのかもしれません。



1	2
3	4

- 1 NUマーク
- 2 NUマークの図法（「名古屋大学学章規程」）
- 3 シャチバッジのデザイン
- 4 四ッ谷3丁目交差点の看板